

京都府埋蔵文化財情報

第113号

共同研究 軽石考 古墳時代中期における石製品の生産と流通 -----小池寛・引原茂治-1	
聖武天皇と天平文化 30周年記念講演会上田正昭理事長講演記録-----	7
平成22年度発掘調査略報-----	16
1. 鳥取橋遺跡	
2. 大内北古墳群（3号墳）	
3. 中山城跡	
4. 平安京跡	
5. 長岡京跡右京第994次・井ノ内遺跡	
6. 長岡京跡右京第995次・開田遺跡・開田古墳群	
7. 長岡京跡右京第996次・上里遺跡	
8. 長岡京跡右京第997次・松田遺跡	
9. 長岡京跡右京第998次・友岡遺跡	
10. 下馬・片山遺跡	
発掘余話第2回 発見と考古学-----	31
長岡京跡調査だより・109-----	37
普及啓発事業-----	39
センターの動向-----	44

2010年11月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

軽石考

古墳時代中期における石製品の生産と流通

小池寛・引原茂治

1. はじめに

この共同研究のテーマである古墳時代中期における石製品の研究は、墳墓調査によって出土する緑色凝灰岩や滑石などの副葬品研究において進展してきた。また、近年、集落遺跡の発掘調査が数多く実施され、滑石などの石製品および石製模造品の生産体制や生産工程が把握されるに至っている。しかし、集落遺跡内で出土する石製品の原石に関する搬入元や搬入ルートなどの流通に関する研究は、原石の同定が非常に困難なため進展していないのが現状である。

この共同研究では、京都府南山城地域における集落遺跡の調査成果を基に、集落遺跡内で出土する軽石の出土と流通について、基礎的な資料収集を行った。本文は、その結果をもとに軽石の流通についての見通しを提示することを目的としている。

2. 軽石をめぐる問題点の指摘

この共同研究は、京都府相楽郡精華町森垣外遺跡^(注1)の発掘調査成果がその動機付けとなっている。森垣外遺跡は、古墳時代中期に盛行する掘立柱建物を主体とする集落遺跡であり、鞆羽口や鉄滓、椀型滓などとともに楔などの鉄製工具が出土していることから集落内で鍛冶が行われたことが判明している。また、それらの技術導入に大きな役割を担った渡来系の技術者集団の集落内への参入を示す陶質土器や韓式土器などの朝鮮半島系土器が多数出土している。さらに、朝鮮半島から招来された馬の存在を示す馬歯や飼料用としての製塩土器などの出土がみられる。一方、集落内祭祀に関係する滑石製模造品やその原石、桃種子などの出土も併せて確認されている。

そのような状況のなか森垣外遺跡において軽石製品を確認したことを契機として集落遺跡の軽石に焦点をあて、古墳時代中期における交易の一端を詳らかにするため搬入元として和歌山県沿岸部での採集作業を



第1図 軽石採集地

実施した。

一般的に軽石は、激しく摩耗するため集落遺跡での使用実態については不明な点も多い。また、摩耗が著しいことから集落遺跡での確認例は僅かである。そのため、今まで研究の対象となり得なかった側面もある。現時点で畿内での出土は、僅かではあるが、縄文時代、弥生時代、古墳時代の集落遺跡から出土事例が報じられている。また、和歌山県岩出市吉田遺跡では中世の浮きとしての事例が知られていることから各時代を通して物流の対象であったことを示唆している。

軽石は、漁具の一種である「浮き」として使用されたことが、軽石の表面に彫り込まれた切り目や穿孔などから推定できるが、実験的に金属器用の鏝落として使用されたことがこの共同研究で想定し得る状況となっている。一般的に砥石は、方形柱状体の砥石とともに古墳時代中期には提げ砥石が出現することが確認されている。提げ砥石出現の背景には、鉄器の集落内における広範な普及との密接な関係が想定できる。このことから古墳時代中期の集落遺跡内の軽石の出土にも、副次的ではあるが提げ砥石の普及と同じような要因があったものと解釈できるのである。

3. 軽石の採集について

現在、地質学的には畿内内陸部で軽石を産出する岩帯は確認されておらず、遠方より搬入されたと考えられる。一般的に軽石は、太平洋岸の漂着物として採集されることが多く、和歌山県串本本市串本中学校遺跡から比較的多くの破片化した軽石が遺構検出面に包含されている状況が確認されている^(注2)。また、海流と漂着物の相互関係の研究によれば、和歌山県有田市女浦海岸から串本町一帯にかけての砂浜で熱帯起源の果実と種子がかつて確認されている^(注3)。なお、瀬戸内沿岸では雑多な漂着物自体が少量確認できるものの、軽石は、ほとんど確認されていない状況である。

同地域を採集地として認識した要素として、和歌山県沿岸地帯が畿内に地理的に近いことと、海南市西ノ庄遺跡の製塩土器が、畿内各地で出土することから、畿内政権と密接な関係が想定される点などがある。それらのことを念頭におき、同地域で軽石の採集を行った。なお、寛永15(1638)年に編集された『毛吹草』には、紀伊の産物として「浮石(かるいし)」が収録されており、少なくとも江戸時代には和歌山県の特産品として名を連ねていたことがわかる。和歌山県と軽石の関連を考えるうえで重要な記述である^(注4)。最後に、軽石の採集時期は、3月末期であり、季節風が激しい時期である。以下、採集地点と採集状況について概観する。

- ①和歌山市和歌浦 和歌浦は、紀州青石の露頭が岸壁に見られるが、現在のところ、軽石などが漂着できるような砂浜がほとんど残存しておらず、漂着状況は不明である。
- ②和歌山市浜の宮海岸 浜の宮海岸では少量の軽石を採集したが、長径は3cm程度である。漂着地としてはやや瀬戸内側に位置していることが採集状況と関係する可能性が高い。
- ③有田市女浦海岸 長径3.3~11cmの大きささまざまな軽石を採集した。海域に突出した浜辺であり、軽石が漂着する条件として女浦海岸の地理的環境は、典型として重要である。
- ④御坊市野島海岸 野島海岸では、軽石は採集できなかった。やや奥まった地形であることが要因と考えられる。

⑤印南市津井海岸 津井海岸は太平洋に面した海岸である。浜の基部にあたる奥まった地点では採集できなかったが、先端部では長径10cm程度の個体を採集することができた。先に述べた女浦海岸同様、多くの軽石を採集することができた。

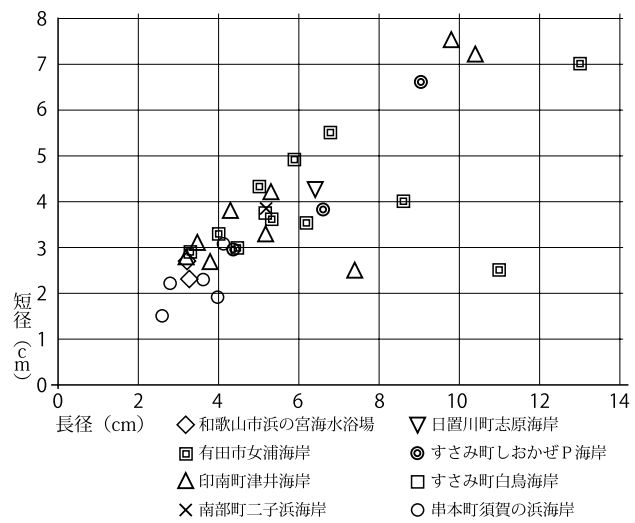
⑥南部町鹿島海岸・⑦南部町二子浜海岸 両海岸は、南白浜海岸一带から直線距離にして15km北西部に位置している。後で述べる南白浜海岸一带と同じく、長時間、長距離の採集を行ったが、5cm程度の軽石を1点採集したのみであった。浜には、拳大の楕円形礫が整然とならび、雑多な漂着物すら確認できない状況であった。

⑧日置川町志原海岸 南白浜海岸一带は、最も複雑な地形を呈しているが、長距離にわたって採集を行ったが、採集量は僅かであった。他の漂着物自体も少なく、深く入り込んだ地形に起因するのではないかと考えられる。なお、夏季には砂浜清掃が実施され、漂着物が取り除かれるとのことであるが、地元住民から聞いたところによると採集を行った3月末期には清掃が実施されておらず、漂着物が僅かであった要因は、事前清掃の結果ではないことを確認している。

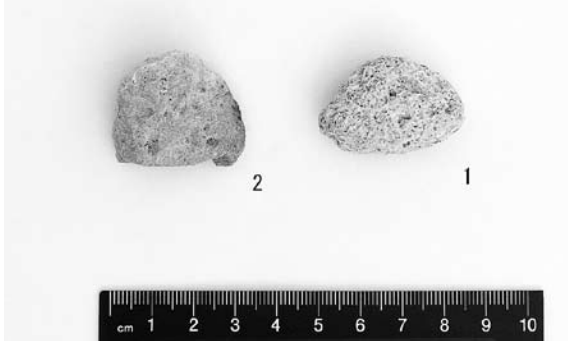
⑨日置川町志原海岸・⑩すさみ町しおかぜP海岸・⑪すさみ町白鳥海岸 これらの海岸一带は、後述の串本町須賀の浜海岸に比べて波も荒く、北部の海浜部と同じく雑多な漂着物が見られた。採集できた軽石は、5cm前後の個体を

付表 軽石法量表

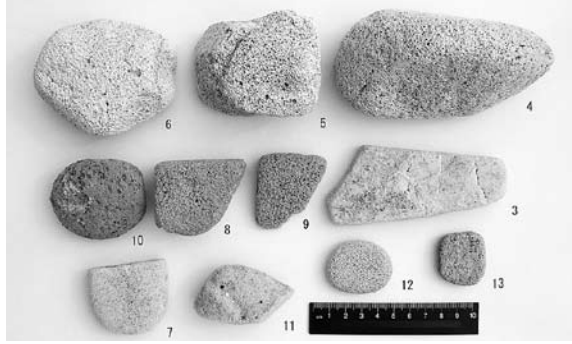
番号	採集場所	地図番号	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	色調
1	和歌山市 浜の宮海水浴場	2	3.3	2.3	1.3	灰白色
2			3.2	2.7	1.7	淡橙色
3	有田市 女浦海岸	3	11	2.5	1.5	灰白色
4			13	7	6.3	灰白色
5			6.8	5.5	4.7	灰白色
6			8.6	4	3.7	灰白色
7			5	4.3	1.7	灰白色
8			5.3	3.6	2.9	灰色
9			4.5	3	1.5	灰色
10			5.9	4.9	2.8	灰黄褐色
11			6.2	3.5	2.3	灰白色
12			4	3.3	1	灰白色
13			3.3	2.9	0.9	灰色
14	印南町 津井海岸	5	10.4	7.2	6	灰白色
15			9.8	7.5	5.2	灰黄褐色
16			7.4	2.5	3	灰白色
17			5.3	4.2	2.6	灰色
18			4.3	3.8	2.1	灰白色
19			3.8	2.7	2	灰白色
20			3.5	3.1	1.4	灰白色
21			5.2	3.3	2	灰白色
22			3.2	2.8	1.1	灰白色
23	南部町 二子浜海岸	7	5.2	3.8	2	灰白色
24	日置川町 志原海岸	9	6.4	4.3	2.8	灰白色
25	すさみ町 しおかぜP海岸	10	9	6.6	6	灰白色
26			6.6	3.8	3	灰白色
27			4.5	3	2.8	灰白色
28	すさみ町 白鳥海岸	11	5.2	3.7	2.6	灰白色
29	串本町 須賀の浜海岸	12	4	3	3	灰黄褐色
30			2.7	2.2	1.4	灰白色
31			3.9	1.9	1.4	灰白色
32			2.5	1.5	1.2	灰白色
33			3.5	2.3	0.9	灰白色
34			2.7	2	1.3	灰黄褐色



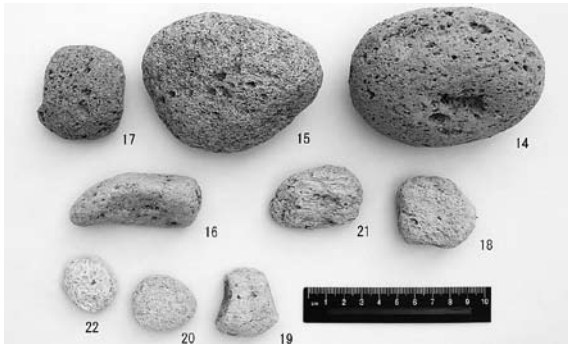
軽石法量グラフ



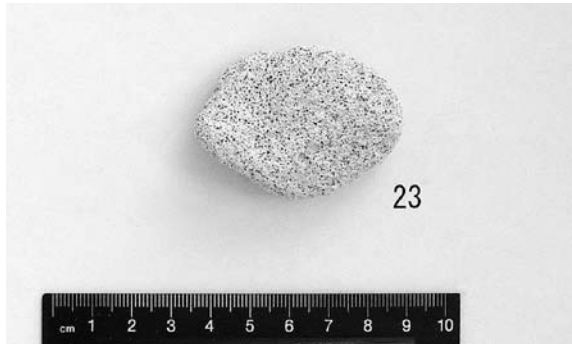
②浜の宮海岸採集の軽石



③女浦海岸採集の軽石



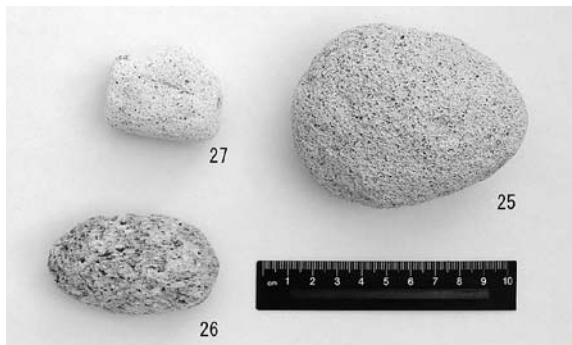
⑤津井海岸採集の軽石



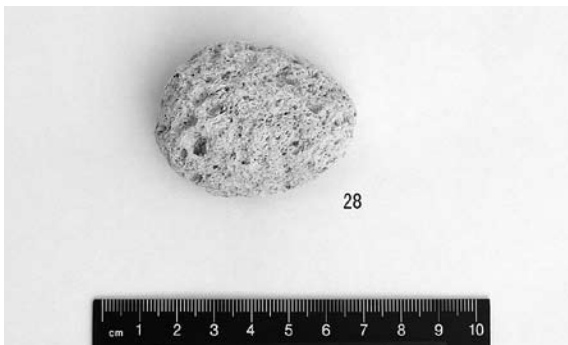
⑦二子浜海岸採集の軽石



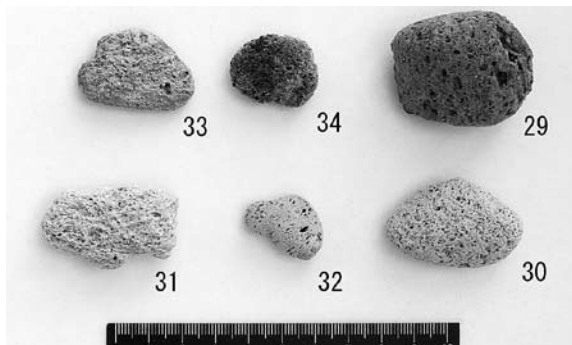
⑨志原海岸採集の軽石



⑩しおかぜP海岸採集の軽石



⑪白鳥海岸採集の軽石



⑫須賀の浜海岸採集の軽石

複数採集できた。なお、季節的に冬季か台風期の荒波によって漂着する可能性が指摘できるが、漂着物が雑多である共通要素は認められるものの、海南付近の状況と比較すれば、軽石は、非常に少ない採集量である。

⑫串本町須賀の浜海岸 串本町須賀の浜海岸の砂浜は非常に広く、また、奥行がある。そのた

め、穏やかな波が打ち寄せる海岸でもある。雑多な漂着物を確認することはできなかったが、最長軸4cm程度の軽石を複数採集することができた。なお、先に述べたように串本中学校遺跡の発掘調査では、遺構検出面である砂層から一定量の微細な軽石が検出されるとの報告があり、今回の採集結果と状況は近似している。

以上、各地域の軽石について概観したが、浮子や工具の錆落として使用された可能性を想定した場合、少なくとも長径10cm程度の個体は必要であることから、和歌山県沿岸部でも印南町津井海岸以北の海岸で採集された軽石が、流通した可能性を指摘することができる。

4. 軽石の流通について

この共同研究では、以上のように古墳時代中期の滑石、製塩土器などの物流を複合的に捉えるため、軽石の採集作業を和歌山県沿岸で実施した。

採集を行った和歌山県南部の海浜部一帯では、縄文時代草創期からの遺跡が点在しており、狩猟を中心とした内陸部での生業と漁労を中心とした沿岸での生業が盛んに行われたことが把握されている。特に、高山寺貝塚は、縄文時代草創期の押型文土器が出土する遺跡として知られており、淡海水の相違はあるものの滋賀県葛籠尾崎とおなじ地理的条件下に生成された縄文草創期集落遺跡であり、縄文集落の在り方を研究する上で重要な遺跡であるといえる。一方、弥生時代に比定できる田辺市上秋津山田代からは、全高1m以上の突線袈裟襷文銅鐸が出土している。弥生時代後期に比定できる当該資料は、集落の様相は不明であるが、海浜部における弥生時代遺跡の優位性を示す遺物として考えることができる。

古墳時代では、数多くの古墳や集落遺跡が確認されている。磯間岩陰遺跡からは、海浜部の生業と関係する釣り針とともに、鹿角製刀剣装具が出土しており、畿内政権との結び付きを示唆する遺物として注目される。くわえて、朝鮮半島からもたらされた陶質土器や国産の初期須恵器などの出土は、この地域での交易のあり方を示している。

一方、紀伊には、岩橋千塚をはじめ、多くの渡来人の参入を示す遺跡や遺物が認められるが、これらの古墳や集落遺跡の存在が、先に述べた製塩土器や滑石の広域移動の根拠であり、軽石についても交易の対象となった視点を獲得することができた歴史的環境そのものである。

次に、京都府における古墳時代中期の集落遺跡の発掘調査は、森垣外遺跡などが所在する南山城地域と今里遺跡、神足遺跡、開田城ノ内遺跡などが所在する乙訓地域、そして、里遺跡、鹿谷遺跡、池上遺跡などが所在する口丹波地域において調査事例が増加している。また、畿内内陸部の古墳時代中期集落遺跡では、大阪府陶邑古窯址群で焼成された須恵器やさまざまな鉄器などが出土するが、これらは政治的に管理された交易等により搬入されたことが想定される。また、生活や祭祀、そして、工具生産などに多用された塩を運搬した製塩土器も一定量出土する。製塩土器の形態的特徴や胎土、調整技法などからどの地域から搬入された製塩土器であるかを特定することができる。特に、各地域の中核的な古墳時代中期の集落遺跡では、和歌山県紀淡海峡に所在する西ノ庄遺跡からもたらされた製塩土器が一定量出土する傾向がある。一方、西ノ庄遺跡周辺

の古墳では、副葬品として畿内中枢部から分配された鉄器や須恵器が多く出土していることから、西ノ庄遺跡が畿内政権下に組み込まれた製塩工房であったことが指摘されるにいたっている。

また、集落内祭祀に使用された滑石製模造品についても、緑色を基調としており、和歌山県粉河町や桃山町で採集される滑石に酷似していることから、当該地から畿内中枢部の古墳時代中期の集落遺跡に搬入されたことが確実視される状況である。

製塩土器及び滑石は、その生産地や採集地が異なっており、同一集団によって管理がなされていたとは考えられない。しかし、両者とも畿内中枢部の各遺跡から出土していることから、生産地や採集地は異なるものの、和歌山県北部において一元的に管理され、交易品として流通した可能性が高いことがうかがわれる。従来、軽石については、漂着物であることと集落遺跡からほとんど出土しないことから、基礎的な研究自体が行われず、製塩土器や滑石に付加された政治的側面を論議するまでには至っていない。しかし、この共同研究の収集調査により、和歌山県南部の海岸において採集された軽石が、採集後は一元的に集約され、交易品として流通した可能性を指摘するに至ったといえる。今後は、集落遺跡からの出土例の把握を行うことによって流通の実態を把握できるものとする。今回の共同研究では、その基礎資料の集積と方向性を確認できた。

5. まとめ

本文は、和歌山市和歌浦海岸から串本町須賀の浜海岸にかけての海岸で軽石を採集した結果報告である。結果的には、和歌山市和歌浦・浜の宮海岸、有田市女浦海岸、印南町津井海岸、串本町須賀の浜海岸などの紀淡海峡以南の西面する海岸に多く漂着している傾向を抽出することができた。また、当地域で特徴的な遺物として製塩土器と緑色を基調とする滑石をあげることができるが、軽石についても、それらと同じ流通をしていたのではないかという問題提起を行った。時代的には、今までの研究成果と対比しやすいこともあって古墳時代中期に限定して述べたが、縄文時代から弥生時代における流通についても、今後、調査の必要を感じている。軽石が有する資料的な限界などを考慮すると、なかなか、言及できる状況ではないが、縄文土器や弥生土器などの影響を積極的に評価したうえで、慎重に論じる必要がある。

今後は、内陸部の集落遺跡からの軽石出土事例の集成を行い、今回の基礎的作業と比較検討する必要を指摘しておきたい。なお、文中の遺跡の詳細については、軽石出土例の集成時に述べる予定であり、文献については割愛した。

(こいけ・ひろし = 当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第1係長)

(ひきはら・しげはる = 当調査研究センター調査第2課第1係主任調査員)

注1 森垣外遺跡の調査報告は、当調査研究センターが発行している『京都府遺跡調査概報』第77・86・91・96冊に所収している。

注2 (財)和歌山県文化財センター村田弘氏のご教示による。

注3 京都府京都文化博物館『海を渡って来た人と文化』1989

注4 松江重頼編 新村出校閲 竹内若校訂『毛吹草』(岩波文庫) 岩波書店 1943

聖武天皇と天平文化

恭仁京をめぐって

－ 30周年記念講演会上田正昭理事長講演記録－

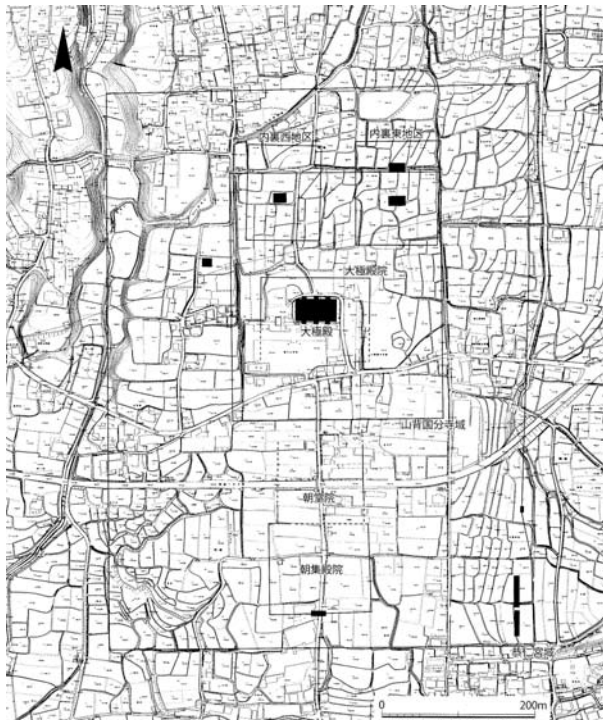
今日はもう9月になっておりますのに酷暑が続いております、この暑い中おいでいただいた皆さんは、本当に古代史を好きで古代史を愛している方ばかりではないかと思えます。先ほど私どもセンターの事務局長さんからお話がございましたように、昭和56年の4月に当センターがスタートいたしましてから本年が足かけ30年ということになります。そこで今日はその30周年を記念して講演会を開催することになりました。振り返りますと、初代福山敏男先生、二代樋口隆康先生の後を受けて、現在理事長をつとめさせていただいておりますが、このセンターが設立されてから、京都府内で様々な発掘成果を挙げてまいりました。

本年は和銅3年、西暦710年3月10日に藤原京から平城京に都が遷りましてからちょうど1300年ということで、今、奈良では様々なイベントが行われております。私もこれまで3回、奈良市、橿原市での講演・シンポジウムに招かれましたけれども、その平城遷都1300年にちなんで、わが京都が奈良時代どんな役割を果たしたか。それを講演ならびに展覧会で知っていただくことになりました。

今日、私は「聖武天皇と天平文化」というテーマで、主として恭仁京の問題を中心にお話ししたいと思って参りました。よく教科書その他で奈良時代は、7代74年というように申しますし、またそのように書いてあります。しかし、正確に言えば奈良時代は8代です。なぜなら、長岡に都を定められた桓武天皇が即位されたのが天応元(781)年であって、延暦3(784)年の12月11日に平城京から長岡京に都が遷るまで、平城京に都されていたのは桓武天皇です。したがって、奈良時代は、正確には8代と言うべきであります。しかも、その74年の間、都は平城京にずっと在ったかという、今日おいでになった古代史に詳しい皆さんであればどなたもご存じのように、天平12(740)年の12月15日、平城京から都は恭仁宮に遷ります。天平12年の12月15日から、都は平城京じゃなくて、京都府南部、現在で申しますと木津川市の加茂町に内裏が造営され、大極殿ができ、朝堂院ができ、朝集殿院ができたわけです。そして、天平16年の2月26日まで、奈良時代の都はわが京都、木津川市の加茂町にあったわけです。その都が難波宮に遷りまして、天平17年の5月11日、聖武天皇は再び平城京に戻られるわ



写真1 上田先生講演の様子



第1図 恭仁宮推定図
 (『京都府埋蔵文化財調査報告書』平成21年度 京都府
 教育委員会より 一部改変)

けですね。ですから、天平という時代の中心をなす天平15年の折の都は、平城京ではなくて、わが恭仁京でした。

恭仁京の調査は、昭和48年から現在まで、京都府教育委員会が中心になって大きな成果をあげました。皆さんのお手元の資料の最初に図が載っておりますのでご覧いただきたいと思います(第1図)。その調査の結果ですね、内裏が二つある。東地区と西地区があることが明らかとなります。そして東地区には聖武天皇、西地区には元正太上天皇が住んでおられたことが明らかになっています。元正天皇は、奈良時代2代目の女の天皇ですね。弟が文武天皇です。文武天皇のお姉様が元正天皇です。その元正天皇が亡くなったのが天平20年の4月。69歳まで生きておられるわけですが、その元正

天皇の内裏が西側にございました。そして大極殿・朝堂院が発掘されましたけれども、その大極殿・朝堂院は、平城京の第一次大極殿・第一次朝堂院を遷したことが明らかになっております。しかも、朝堂院の南の朝集殿院よりも朝堂院の幅が狭いというのも恭仁宮の朝堂・朝集殿院のたゞまいが平城京をそのまま倣ってつくられていることを明らかにしています^(注)。

その恭仁京が天平という時代の中心の都であったということ、平城遷都1300年の時代を振り返る中で、京都の皆さんにもう一度確認していただきたい。「奈良時代」と申しますので、平城遷都1300年は奈良県や奈良市の問題であって京都府民は関係がない、というようにお思いであればそれは明らかに間違いです。そもそも「天平」という年号はどうしてついたのか。神亀6(729)年の2月、木簡がたくさん出ましたのでよくご存じだと思いますが、天武天皇のお孫さんで、お父さんは高市皇子です。その長屋王が、左大臣として政治を担当しておりました。天皇のお孫さんが政治の中核を担っていますから、皇臣政治と申しておりますが、その皇臣政治のトップに立っていたのが左大臣長屋王。藤原氏にとっては大変目障りな存在でありました。そして、長屋王は謀反の嫌疑をかけられ、屋敷を包囲され自刃に追い込まれて長屋王は倒れます。その後、大阪府の河内国の古市郡で、加茂小虫^{かものこむし}という人物が、亀の背中に「天王貴平治百年」という文字が書いてある亀を見つけたというので、朝廷に差し出したんですね。その仲介の労をとったのは藤原不比等の三男坊の藤原宇合^{うまかい}。古市郡というのは、光明皇后のお母様になる県犬養三千代の本貫地(出身地)です。そこで、「天王」の「天」と、「貴平」の「平」をとって、神亀6年8月5日に年号が「神亀」から「天平」に替わる。この天平改元の背景に藤原氏がいたことは誰の目にも明ら

かであります。そして、その5日後、天平元年の8月10日、藤原不比等と県犬養三千代との間に生まれた安宿媛。「安宿」という字を書いておりますが、これは河内国の安宿郡あすかべぐんに由来します。そこは、藤原不比等の乳母が田辺史たなべのふひとの娘でありました。その田辺史の出身地は安宿郡。その乳母の故郷の「安宿郡」、その安宿を、不比等と三千代の間に生まれた女性に名付ける。これが後の光明皇后です。律令の規定によりますと、皇后は皇族出身の女性でなければならない。それを、天平改元5日後の8月10日に安宿夫人を皇后にしたわけです。その時、聖武天皇が出された宣命をみますと、皇族出身でないものを皇后にした例はであると記されています。それは仁徳天皇の時代の話ですけれど、葛城襲津彦の娘、盤之媛いわのひめを仁徳天皇の皇后にした古い例を出して、安宿媛を皇后にする立後の理由にしています。「天平」という年号自体は、藤原氏の政治的画策によることは、歴史を勉強したものであれば多くの方が知っていることです。その都があった平城京から、なぜ恭仁京に遷ったのか。平城遷都の最大の功績者は、私が朝日新聞社から出しました『藤原不比等』という著作の中で詳しく書いておきましたように、藤原不比等です。その藤原不比等の献策によって実現した平城京をなぜ棄都して南山城の木津川市の加茂町の所に新しい都をつくる必要があったのか。これは平城遷都1300年の問題を考えるときの非常に重要な研究テーマのひとつです。私は、3度、平城遷都1300年を巡るシンポジウム・記念講演に招かれましたけれど、ほとんどの先生が恭仁京の問題には触れておられないんですね。まことに残念です。したがって、今日は恭仁京が奈良時代において、いかに大事な都であったかということ、皆さんと一緒に考えたいと思って参りました。

なぜ平城京をはなれて恭仁に都が遷ったのか。私は、その理由はおよそ4つばかりあるのではないかと思っています。

第一番目の理由は、藤原広嗣ひろつぐの乱です。天平12年の9月。西暦740年ですが、九州大宰府だいの大式である、次官(長官は大宰帥)ですが、藤原広嗣が謀叛を起こします。これは672年の壬申の乱に次ぐ古代の大変大きな争乱です。広嗣は僧玄昉げんぼう、吉備真備きびのまきびを弾劾しまして、九州大宰府を拠点に反旗をひるがえした争乱が起きました。その乱が平城京の聖武天皇の耳に入って、にわかに聖武天皇は伊勢へ行幸される。伊勢行幸の発端は、藤原広嗣の内乱です。広嗣は10月22日に逮捕される。そして11月1日に処刑されているわけです。争乱は平定されたんですが、にも関わらず聖武天皇は近江へ入って、そして天平12年の12月15日に恭仁京を正式に都とされました。恭仁宮遷都の一つの前提には、広嗣の乱がある。

それだけではない(第2番目の理由)。恭仁宮の跡へおいでになりますとわかりますように、前には川が流れておりまして大変風光明媚な場所であります。小洛陽というように褒めたたえた史料もあります。風光明媚な場所である。恭仁京を詠んだ大伴家持の歌を資料1に挙げておりますが、『万葉集』の歌をご覧頂いたら、いかに風光明媚な土地であったということをうかがうことができます。読んでおきますと、「十五年」というのは天平15年、西暦743年、癸未の秋8月16日、家持26歳、内舎人うどねりの大伴宿祢家持くにのみやこほの久迹京を讃めて作りし歌。そこに「今造る久迹の都は山川のさやけき見ればうべ知らすらし」。まさに風光明媚の土地でした。

765 一重山隔れるものを月夜良み門に出で立ち妹か待つらむ

1060 三香原久迓の都は荒れにけり大宮人のうつろひぬれば

1037 今造る久迓の都は山川のさやけき見ればうべ知らすらし

久迓京を讚めて作りし歌一首
十五年癸未の秋八月十六日、内舎人大伴宿禰家持の

資料1 恭仁京を歌った万葉歌

しかし、それだけではない(第3番目の理由)。旧山陰道や近江への道に繋がる重要な交通の要所でもございました。私は、木津という港の存在を忘れてはならないと思っています。藤原京の弱点はいろいろございますが、一つに藤原京は北西が低くて東南が高い。こういう地勢は都の地勢には全くあわない。天子南面ですから、北が高くて南が低い「北高南低の地形」がふさわしいのですが、藤原京は東南が北西よりも高い。地形がアンバランスです。そのほかにもいろいろな理由がありますが、藤原京には港がないんですね。平城京に遷った時に、強く平城遷都の意識の中で木津の港が重視されていることが、いろんな史料によって明らかになります。恭仁京に都が遷ったひとつの理由は、わたくしは木津の港の存在を忘れてはならないというように思っています。

第4番目は、当時勢力を持ってまいりました橘諸兄の別業がこの相楽郡の地にあったということです。これは、時間があれば後

で申し上げますけれども、なぜ、馬場南遺跡で万葉の歌木簡が見つかったかという問題も、恭仁京と木津の港の問題を抜きに論ずることはできないと考えています。そして、橘氏との関わりあいを無視することはできない。馬場南遺跡からはご承知のように墨書土器がたくさん出て参りました。その中に、「神雄寺」とはっきり書いてる墨書土器が3点ございます。「神雄」と書いている墨書土器が4点見つっております。そして、最も多い墨書土器は「神寺」と書いた墨書土器で9点見つっております。「神寺」というのは、大変意味があって、わが国の仏教説話集の現伝最古のものである『日本霊異記』上・中・下と三巻分かれております。その下巻の第十九話を機会があればお読み下さい。宇佐八幡の神宮寺、「弥勒寺」といいますが、この弥勒寺を「大神寺」と書く。「神寺」というのは神仏習合の寺に使っている例があります。私はこの「神寺」という墨書土器の寺、神雄寺は、神仏習合のお寺ではないかと、墨書土器を見た瞬間に思いました。そこから万葉歌木簡が出土したのも恭仁京と木津の港と平城京の賀世(鹿背)山西道とのつながり、そして、当時勢力を持っていた橘氏の関係を抜きに考えないわけにはいかないと思っております。そのようにして栄えた奈良の平城京に次ぐ恭仁京が、わずか3年3か月でなぜ「難波」に都が遷ったのか。その問題もあわせて考える必要があると思います。『万葉集』には恭仁京の宮が荒れていく様を歌った歌もあります。資料1の「三香原久迓の都は荒れにけり大宮人のうつろひぬれば」という歌がございしますが、3年3か月で都でなくなるわけですね。そこには、天平12年から財力と労力をつぎ込んで恭仁京の造営が行われました。国家財政の窮乏という問題もそのひとつです。そして何よりも藤原氏と橘氏の政治争いが深刻化してくるわけです。後でも申し上げますが、安積親王が急死する。私はこれは藤原氏の陰謀によるところが非常に大きいと思っておりますが、政局が極めて不安定になったことも、難波遷都への理由であろうと考えています。その恭仁宮で天平を彩る最大の詔が平城京で出たのではなく、

恭仁宮で詔が出されていることを、平城遷都1300年のなかで考え直して欲しい。

そこで時間が許す限り資料にそってお話をしていきたいと思えます。資料2(1)『続日本紀』の天平12年12月のところをご覧ください。一番最後のところに、15日の条ですが、「皇帝在前幸恭仁宮」(皇帝前にありて恭仁宮に幸す)。「皇帝」は聖武天皇、「始めてみやこ京都をつくる」。これは恭仁京造営の話で

(5) 天平十四年八月の条
 錢一百貫、純一百疋布二百端、綿二百屯、以築大宮垣也。

○丁丑、詔授造宮錄正八位下奏、下嶋麻呂從四位下、賜太秦公之姓并

(4) 天平十四年二月五日の条
 是日始開恭仁京東北道、通近江國甲賀郡。

(3) 天平十四年正月の条
 十四年春正月丁未朔百官朝賀、爲大極殿未成、權造四阿殿於此、受朝焉、石上榎井兩氏始樹大楯

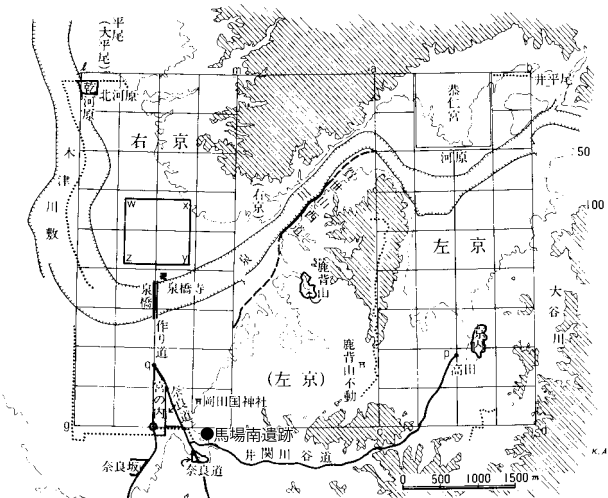
(2) 天平十三年九月の条
 攝津山背四國、役夫五千五百人、○己未遣木工頭正四位下智努王、民部卿從四位下藤原朝臣仲麻呂散位外從五位下高岳連河内、主稅頭外從五位下文忌寸黑麻呂四人、班給京都百姓宅地、從賀世山西道以東爲左京、以西爲右京、○丁丑、行幸宇治及山科、五位已上皆悉從駕、追奈良留守兵部卿正四位下藤原朝臣豐成爲留守、

(1) 天平十二年十二月の条
 ○戊午、從不破發至坂田郡橫川頓宮、是日、右大臣橋宿稱諸兄在、前而發、經略山背國相樂郡恭仁鄉、以擬遷都故也、○己未、從橫川發到大上頓宮、○丙寅、外從六位上調連馬養授、外從五位下、○辛酉、從犬上發到蒲生郡宿、○壬戌、從蒲生郡宿發到野洲頓宮、○癸亥、從野洲發到志賀郡天津頓宮、○乙丑、幸志賀山寺禮佛、○丙寅、賜近江國郡司位一級、從天津發到山背國相樂郡玉井頓宮、○丁卯、皇帝在前幸、恭仁宮始作、京都矣、太上天皇皇后在、後而至、

資料2『続日本紀』関連文献1

す。その次、太上天皇とは元正太上天皇。皇后というのは光明皇后で、後に在りて至る。天皇が先に行かれて後に光明皇后と元正太上天皇が赴かれるということになるわけです。

そして、資料2(2)の3行目の下の方、天平13年の9月12日に重要なことが書いています。「從賀世山西道以東爲左京以西爲右京」(賀世山の西道に從って東を以て左京と爲す。西を以て右京と爲す)。つまり、恭仁京は左京・右京が設けられた都であったことも、この資料で明らかです。そのことを明確に復原されたのが京都大学の歴史地理学の足利健亮さん。第2図の恭仁京と賀世山の左京・右京の地図は、足利さんの復原です。大変優れた歴史地理学者でした。彼が大阪府立大学の助教授であったのを京都大学へ迎えた中心に動いたのは私ですし、足利君が教授になるときの選考委員長は私が務めました。大変立派な学者だったのですが、京大在職中に亡くなったのは誠に残念です。その「賀世山西道」の南に下っていく道に面して、万葉歌木簡の出た木津川市の馬場南遺跡があるというこ



第2図 恭仁京復原図
 (足利健亮説に馬場南遺跡の位置を加筆)

ともしっかり思い起こしていただきたい。恭仁京の中心部に繋がる「賀世山西道」の南に下がっていく道に面して馬場南遺跡が存在するという事は、馬場南遺跡が恭仁京と深い関係を持っているということ、私どもに教えてくれます。

資料2(3)の天平14年正月1日の史料には、「大極殿未だ成らずして」とあります。これは内裏から造営が始まるんですね。大極殿はまだできてない。そこで仮に「四阿の殿」を造りて此に於いて元日の朝賀の儀式をあげたということが書いてある。大極殿を平城京から運んでいるということは、この史料を理解するときに非常に大きな意味があります。資料2(4)の天平14年の2月5日には、大仏造営が始まる場所、近江の国甲賀郡への道が恭仁京からつけられているわけです。そして、資料2(5)天平14年には恭仁宮の宮垣が完成してその完成に功績をあげたのが、太秦公の姓を与えられた秦嶋麻呂であることも明記されております。秦氏は恭仁宮でも活躍いたしますし、平安京の造営にも長岡京の造営にも活躍いたしますが、秦氏が都造りに関係する最初の史料が明確に出てくるのは恭仁宮であるということも知っておいていただきたい。そしてこれはあまり注意されておきませんが、資料3(6)。これは長い史料でございますが、天平15年の5月5日、恭仁京で重要な行事が行われております。それは皇太子であった阿部内親王、後の孝謙天皇ですが、恭仁京の群臣の集まっている中で「五節の舞」を舞っているわけです。これは明らかに次の天皇は、阿部内親王であるということ群臣の前で公にした出来事です。5月5日というのは多くの皆さんは端午の節句で、男の子のお祭りのように思っておりますが、これは鎌倉時

代以後の話であって、古代におきましては女の日なんです。現在でも5月5日は「女の天下」と称しまして、早乙女になる皆さんのお祭りが行われるところもあります。歌舞伎のお好きな方は、近松門左衛門の「女殺し油地獄」というお芝居を観られた方であれば知っておられると思いますが、「5月5日は女の天下」という台詞が門左衛門が作ったお芝居の中に出てくる。江戸時代でも5月5日は「女の天下」。その5月5日に阿部内親王が天武天皇が定めたという五節の舞を群臣の前で舞っている。なぜかと申しますと、聖武天皇のお子さんには県犬養広刀自との間に安積親王という有力な皇子がいたんですね。この方が次の天皇になる可能性

(6) 天平十五年五月五日の条

○癸卯、宴群臣於内裏。皇太子親舞五節。右大臣橘宿禰諸兄奉詔奏。太上皇曰。天皇大命。尔坐西。奏。賜。久。掛。母。畏。岐。飛。鳥。淨。見。御。原。宮。乃。大。八。洲。所。知。志。聖。乃。天。皇。命。天。下。平。治。賜。北。平。賜。比。所。思。坐。久。上。下。平。齊。管。和。且。無。動。久。靜。加。令。有。八。礼。等。樂。等。二。郡。並。立。平。久。長。久。可。有。等。隨。神。母。所。思。坐。此。乃。舞。平。始。賜。比。造。賜。比。夜。聞。食。且。与。天。地。共。終。絕。事。無。久。弥。繼。尔。受。賜。行。車。物。且。皇。太。子。斯。王。尔。學。志。頂。令。荷。且。我。皇。天。皇。大。前。尔。貢。事。平。奏。於。是。太。上。天。皇。詔。報。曰。現。神。御。大。八。洲。我。子。天。皇。乃。掛。母。畏。依。天。皇。朝。廷。乃。始。賜。比。造。賜。寶。國。寶。且。此。王。令。供。奉。賜。波。天。下。尔。立。賜。比。行。賜。波。法。波。可。絕。依。事。波。無。久。有。止。見。聞。喜。侍。止。奏。賜。等。詔。大。命。平。奏。又。今。日。行。賜。波。感。平。見。行。波。直。遊。乃。波。尔。不。在。之。天。下。尔。君。臣。祖。子。乃。理。平。教。賜。比。趣。賜。尔。有。良。志。止。所。思。還。是。以。教。賜。比。趣。賜。比。受。被。賜。持。且。不。忘。不。失。可。有。依。表。等。之。二。人。平。治。賜。波。奉。止。所。思。行。等。奏。賜。止。詔。大。命。平。奏。賜。波。久。奏。曰。御。製。歌。曰。蘇。良。美。都。夜。麻。止。乃。久。尔。波。可。未。可。良。斯。多。布。度。久。安。流。羅。之。許。能。未。比。美。例。波。又。歌。曰。阿。麻。豆。可。未。美。麻。乃。弥。已。止。乃。登。理。母。知。且。許。能。寺。与。美。岐。遠。伊。寸。多。且。未。都。流。又。歌。曰。夜。須。美。斯。志。和。已。於。保。支。美。波。多。比。良。氣。久。那。何。久。伊。未。之。且。寺。与。美。岐。麻。都。流。右。大。臣。橘。宿。禰。諸。兄。宣。詔。曰。天。皇。大。命。勅。久。尔。行。賜。比。供。奉。賜。德。尔。依。而。御。世。御。世。當。且。供。奉。禮。親。王。寺。大。臣。寺。乃。子。寺。乎。始。而。可。治。賜。依。一。二。人。寺。選。給。比。治。給。布。是。以。汝。寺。母。今。日。詔。大。命。乃。期。君。臣。祖。子。乃。理。遺。忘。事。無。久。繼。坐。平。天。皇。御。世。御。世。尔。明。淨。心。平。以。而。祖。名。平。戴。持。而。天。地。与。共。尔。長。久。遠。久。仕。奉。之。且。冠。位。上。賜。比。治。賜。布。勅。大。命。衆。聞。食。宣。又。皇。太。子。宮。乃。官。人。尔。冠。一。階。上。賜。布。此。中。博。士。等。任。賜。留。下。道。朝。臣。眞。倫。波。冠。二。階。上。賜。比。治。賜。波。久。勅。天。皇。大。命。衆。聞。食。宣。授。右。大。臣。正。位。橘。宿。禰。諸。兄。從。一。位。

資料3『続日本紀』関連文献2

も十分にあった。橘氏とも深い関係がありましたし、家持とも深い関係があったことが『万葉集』で明らかです。資料4(10)の2行目見て下さい。天平16年正月11日。「安積親王縁脚病從櫻井頓宮還」(安積親王脚の病によりて櫻井の頓宮より還る)とあります。そして、13日には歳17歳でにわかになくなっている。これは藤原氏の策謀によると私は考えて差し支えないと思います。そういう状況の中で、恭仁京の宮で5月5日に舞が行われて、そして資料4(7)の天平15年の5月27日にありますように「三世一身法」が廃止になりまして、「墾田永年私財法」という土地制度に関する根本的な改正法令が出された。国家的土地所有が崩壊して、初期荘園が誕生するスタートはこの天平15年5月27日の「墾田永年私財法」の発布です(資料4(8))。この重要な詔がでたのは平城京ではない。恭仁京なんです。しかも、(8)番の史料をお読みになったらわかりますように、天平15年の10月15日に、「東大寺大仏建立の詔」が出たわけですね。天平を彩る大仏開眼供養会は天平勝宝4(752)年の4月9日盛大に行われますが、その東大寺大仏の建立を正式に詔として出されたのは平城京ではない。恭仁京なんです。恭仁京がいかに天平文化と密接な関係を持ってきたかということは、今申し上げた史料をご覧になってもおわかりになると思います。

この恭仁京の造営に大きな役割を果たしたのが、行基上人です。行基上人のお父様は高志才智という百濟系の渡来人。お母様も蜂田古爾比売という百濟系の渡来人。両親共に百濟から日本に渡ってきた渡来系です。その行基上人が大仏建立に非常に大きな役割を果たされて、天平21年の2月に82歳で亡くなります。私の著作集の第七巻のなかで、行基上人のことも詳しく書いておりますが、資料5をあげておきま

した。その第2段落をご覧下さい。『行基菩薩伝』という行基の伝記がございますが、天平13年の3月に行基が泉橋院、木津川を渡った北側、今も泉橋寺というお寺がありますが、そこに滞在していた17日の日に聖武天皇が泉橋院に行幸されている。そこで行基と「終日清談」したという重要な記事が書かれています。従来の行基研究でもこのことはあまり注目されておられません。今もその寺がありますが、泉橋寺に行くたびに恭仁京造営と行基の役割、行基と聖武天皇とのつながりを感じるわけ

- (7) 天平十五年五月二十七日の条
○乙丑 詔曰 如聞 墾田依 養老七年 格限滿之後 依例 收授 由是 農夫 怠倦 開地 復荒 自今 以後 任爲 私財 無論 三世 一身 咸悉 永年 莫取 其親王 一品 及一位 五百町 二品 及二位 四百町 三品 四品 及三位 三百町 四位 二百町 五位 百町 六位 已下 八位 已上 五十町 初位 已下 至于 庶人 十町 但郡司 者 大領 少領 三十町 主政 主帳 十町 若有 先給 地過多 茲限 便即 還公 奸作 隱欺 科罪 如法 國司 在任 之日 墾田 一依 前格
- (8) 天平十五年十月十五日 的条
辛巳 詔曰 朕以 薄德 恭承 大位 志存 兼濟 勤撫 人物 雖牽 土之 濱已 蓄仁 恕而 普天 之下 未嘗 法 恩 誠欲 賴三 寶之 威靈 乾坤 相泰 修 萬代 之福業 動植 咸蒙 粵 以 天平 十五年 歲次 癸未 十月 十五 日 發 菩薩 大願 奉造 盧舍 那佛 金銅 像一 軀 盡 國銅 而鑄 象 削 大山 以 鑄 堂 廣 及 法界 爲 朕 知識 遂使 同蒙 利益 共致 菩提 夫有 天下 之富者 朕也 有 天下 之勢者 朕也 以此 富勢 造 此 尊像 事也 曷 成 心也 難 至 但 恐 徒有 勞人 無 能 感 聖 或 生 誹謗 反墮 罪辜 是 故 預 知識 者 懇發 至誠 各 招 介福 宜 每日 三拜 盧舍 那佛 自當 存念 各造 盧舍 那佛 也 如 更有 人情 願 持 一 枝草 一 把 土 助造 像者 悉聽 之 國郡 寺司 莫 因 此事 侵擾 百姓 強令 收斂 布告 遐邇 知 朕意 矣
- (10) 天平十六年閏正月十一日 的条
○乙亥 天皇 行幸 難波 宮 以 知太政官 事從 二位 鈴鹿 王 民部卿 從四位 上 藤原朝臣 仲麻呂 爲 留守 是 日 安積親王 緣脚 病從 櫻井頓宮 還 丁丑 癸 時年 十七 遣 從四位 下 大市王 紀朝臣 飯麻呂 等 監護 喪 夏 親王 天皇 之 皇子 也 母 夫人 正三位 縣 犬養宿禰 廣刀自 從五位 下 唐之 女也

資料4 『続日本紀』 関連文献3



阿
支
波
支
乃
之
多
波
毛
美
智

その恭仁京の中心部に繋がる「賀世山道」を下って参りますと木津川市の馬場南遺跡につながる。平城京からは北へ約5kmの場所です。神雄寺は、神仏習合の寺でしたが、私は橘氏と深い関わり合いを持った寺であるということ、発掘成果の直後から終始となえてきました。

そして、「秋萩の下葉もみち」という万葉歌木簡が出土した。現在まで万葉歌木簡は3点見つかっています。ひとつは、奈良県明日香村の石神遺跡。これは「あさなきにきやるしらなみ」という万葉歌を記した木簡が、平成15年に560点出土した木簡中であって、発掘した時は気づかなかったんです。5年後に名古屋の先生が注目された。しかも、これは菱形の板に鋭利な刃物で歌の文句を書いているんです。しかも左から右に書いている。「あさなぎにきよるて」いうのは万葉の文句では「きやる」。「しらなみ」の「弥」が「你」になっておりまして、これはあまり歌の道に精通している人ではないし、鋭利な刃物で板切れに書いている一種の手習いの木簡です。

それから、甲賀市の紫香楽宮、宮町遺跡から10年前に出土したのを、栄原永遠男さんが見つけれられたわけですが、「あさかやま」の歌の上の句。しかし、これはわずか1.2mmの厚さです。表にはご承知の王仁博士^{わにはかせ}の歌と伝える「なにわづにさくやこのはな」の歌が書いてあって、あさかやまの歌が裏に書いてある。紀貫之が『古今和歌集』の仮名序に書いておりますように、この二つの歌は手習いの最初に学ぶ歌の「ちちはは」であると。これは習書の木簡です。

写真2 万葉歌木簡 馬場南遺跡出土
 確実な歌木簡は、当センターが発掘いたしました、写真2にあげておきました、「あきはぎのしたばもみちぬ」という歌木簡。歌会の類の木簡です。しかも出土状況がはっきりとわかっています。その本物が、保存処理が終わりましたので、いま、向日市文化資料館の「天平浪漫紀行・京都」の展覧会で、出ているんですね。レプリカではありません。ほんまものです。まだ行ってない人は、あの展覧会は奈良時代にしばって、非常にユニークな見応えのある展覧会ですが、この木簡を見ずして、万葉歌木簡論はできません。それが今、展覧してありますから、この暑い日に来た皆さんであれば、少々暑くても、この近くの向日市文化資料館にぜひ9月20日までにおいでいただきたいと思います。

なぜ、現在のところ、唯一の歌会の類と関わりある木簡が木津川市の馬場南遺跡で見つかっているのか。これは恭仁京の問題と、橘氏の問題と、木津の港の問題とを抜きにしては語ることができないと思っています。平城遷都1300年で恭仁京の存在意義がほとんど言及されておられませんけれど、私は残念であると思っています。どうか、京都府民の皆様は、平城遷都1300年は、我が京都の問題でもあるということをお考えいただければ幸いです。ご清聴ありがとうございます。(拍手)

注 講演会終了後、京都府教育委員会の発掘調査により、大極殿院では北面回廊ばかりではなく、南面回廊と考えられる遺構も確認されました。

資料5 『上田正昭著作集』（第七巻）

そして天平十三年十月十六日には、恭仁京に通じる賀世山の東河（木津川）に、行基の信奉者も加わって、橋を架けることになる。完成をみて「得度せしむること、惣て七百五十人」と記述するのは、行基に「随逐」する優婆塞・優婆夷が参加していたことを示唆する。

『行基菩薩伝』には、天平十三年の三月に行基が泉橋院に「淹留」し、同月十七日に「天皇行幸」があって、行基と「終日清談」したと物語る。「大菩薩（行基）」は「諸院」建立の「縁由」を奏し、聖武天皇は行基建立の「堺地」を「世々絶えず、宮司に撰録せず」と語ったという。象徴的な伝承である。行基の宗教活動が、天平十年（七三八）のころを過ぎると権力の動向に対応して、現実味をおびていたことを軽視できない。

恭仁京への遷都について『続日本紀』は天平十二年十二月六日の条に、「右大臣 橘 宿禰諸兄、在前に発ち、山背国相楽郡恭仁郷を經略す。遷都を擬ることを以ての故なり」と記す。この「擬遷都」という表記は平城京や平安京の遷都などの場合に比べて異常だが、天平十六年閏正月、「恭仁・難波の二京、何れをか定めて都とせむ。各その志を言せ」との下問があったおり、五位以上の二十四人、六位以下の百五十七人は恭仁京をよしとして、五位以上二十三人、六位以下百三十人は難波京をよしとした。そして同月四日には市人にいづこに京を定めるかを問うた。市人は恭仁京を都にと願ひ、市人の一人が難波、市人の他の一人が平城への遷都を希望したという。

天平十六年（七四四）の二月二十日には、恭仁京の高御座と大楯を難波宮に運び、木津川・淀川の水路によって恭仁京の兵庫の武器類を難波へ移送した。そして同月二十六日、難波宮を皇都とする勅があった（ただし天平十七年五月には都は平城京にもどる）。こうした動向にも行基は敏感であった。天平十七年に撰津国西成郡御津村に大福院と同尼院、同郡津守村に難波度院・枚松院・作蓋部院を建立したのも、港湾（難波津・住吉津など）の整備にその土木技術をいかし、難波宮の復興をめざしたであろう行基の想いが重なっていたと思われる。

平成22年度発掘調査略報

とっとりばし 1.鳥取橋遺跡

所在地 京丹後市弥栄町和田野車谷・井辺森山

調査期間 平成22年5月12日～7月6日

調査面積 850㎡

はじめに 今回の発掘調査は、一般国道482号道路(丹後弥栄道路)の新設改良事業に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。遺物採集地として知られる鳥取橋遺跡は、竹野川とそこに合流する鳥取川や奈具川によって形成された沖積低地が広がっており、現在、水田が営まれている。今回は、竹野川左岸の水田に上記道路が計画されたことから調査に至ったもので、鳥取橋遺跡の調査としてははじめての調査となる。

調査概要 遺跡の詳細が不明なため、まず調査対象地に合計10か所の調査区を設定して、遺構・遺物の広がりを確認することとした。

調査の結果、いずれの調査区においても、遺物の出土は見られたものの、顕著な遺構を検出することはできなかった。各調査区における土層の堆積状況はおおむね似通っており、現地表下1.5～1.8mまでは茶褐色系の粘質土で、耕作に伴う堆積層と考えられる。その下部には砂・粗砂・小礫を主体とする堆積層がみられ、竹野川の河川堆積層と思われる。この河川堆積層から多数の遺物が出土した。

出土した遺物には、前期から後期にかけての弥生土器、古墳時代前期の古式土師器、古墳時代

後期の須恵器、飛鳥～平安時代の須恵器・土師器、中世の白磁・青磁・天目茶碗・土師器などがある。いずれも河川堆積層からの出土であるが、調査地の南端に設定した調査区では、ややまとまった弥生時代後期の土器が出土したことから、近くに当該期の遺跡がある可能性がある。

まとめ 今回の調査は、鳥取橋遺跡におけるはじめての調査で、多数の遺物が出土したものの、顕著な遺構を確認することはできなかった。調査地点の周辺にこれらの時期の遺跡の広がりが予想される。



調査地位置図(国土地理院 1/50,000 網野・宮津)

(筒井崇史)

おおうちきた
2.大内北古墳群(3号墳)

所在地 京丹後市大宮町森本星ノ内
調査期間 平成22年4月30日～9月22日
調査面積 1,200㎡

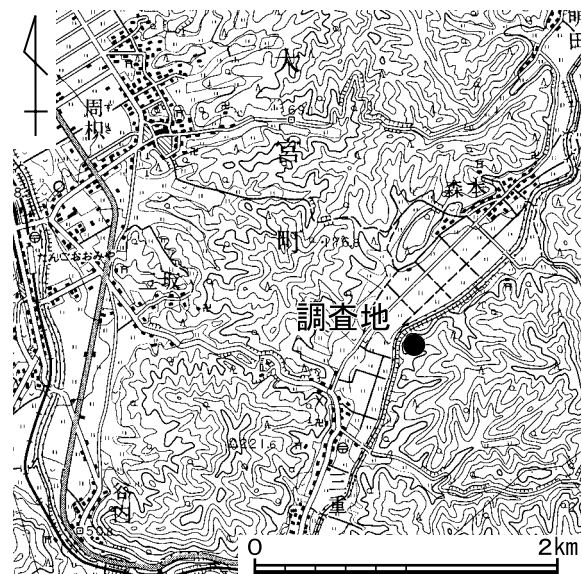
はじめに 今回の発掘調査は、鳥取豊岡宮津自動車道(野田川大宮道路)の新設工事に先立って実施した。大内北古墳群は丹後半島を貫流する竹野川上流部に位置し、狭隘な谷平野に派生する標高115m前後の丘陵尾根端部に立地する。同丘陵上には大内古墳群(16基)・大内東古墳群(3基)が分布し、このうち調査が行われた大内1号墳は竪穴式石室1基をもつ長径25mの楕円形墳で、鉄製武器類や農具類が出土している。

調査は、大内北古墳群を構成する5基の古墳と周辺の3か所の古墳状の隆起を対象に実施した。調査の結果、大内北3号墳から多数の埋葬施設を検出し、また、他の4基の古墳および3か所の古墳状隆起については古墳でないことが判明した。

調査概要 大内北3号墳は丘陵の隆起部を利用した南北23m、東西25m、高さ4mを測るいびつな円墳で、平野部からの比高差は50mを測る。墳頂部は長軸12m、短軸8mの平坦面を呈している。段築や埴輪・葺石等の外表施設はみられない。墳頂部から竪穴式石室(1基)、組合式箱式石棺(4基)、木棺(3基)、小型箱式木棺(1基)と、それぞれ形式の異なる9基の埋葬施設(主体部)を検出した。竪穴式石室は主軸を東西に置き墳頂北側の縁辺に、箱式石棺は墳頂平坦部の東側と南側の縁辺部に沿うように、また木棺直葬は墳頂の中央から西側にかけて全て主軸を南北に揃えて並置する。このように、墳頂部平坦面全体に稠密な配置状況を示す。

1)竪穴式石室(主体部S X01) 長さ3.4m×幅2mの墓壇内に、石室内法の長さ2m、幅0.5m、高さ0.3mを測る竪穴式石室を構築する。石室側壁は1段ないし2段程積み上げ、その上に天井石6枚を架す。両小口部は扁平な割石1石で構成される。石室背後の墓壇内に裏込めの石材を充填し、天井石の上面は灰色粘土で被覆する。石室内には棺痕跡はなく、槍先(短剣か)と鑿状鉄器各1点が出土した。

2)組合式箱式石棺(主体部S X02・03・05・06) いずれも長さ2.2m、幅1.3m、深さ0.6m前後の墓壇内に、長さ0.6～0.7m、幅0.2m、深さ0.2m程の小規模な箱式の石棺を配する。棺身は扁平な割石、蓋石は縦長の石材を並べて構



調査地位置図(国土地理院 1/50,000 宮津)

築しており底板をもたない。S X05は規模が異なるものの墓壙内に石材を充填しており竪穴式石室(S X01)と類似した構造をもつ。S X02の側石壁面には赤色顔料を塗布する。S X06棺内から刀子1点が出土した。

3)木棺(主体部S X04・07・08・09) 花崗岩の風化土を掘削し墓壙を構築した後、さらにその内側に長さ4m、幅0.8m程の木棺を据え置くための土壙を掘り込む。棺床は「U」字状の断面を呈し、割竹形もしくは舟底形の底部をもつ木棺が想定される。S X07・08は長さ約5m、幅約3.5mを測る。一つの墓壙内に2棺を並置するものである。このうちS X07では、頭位と思われる棺北側部に赤色顔料の集積がみられた。S X08からは鎌1点が出土した。S X09は両小口側に棺を固定するためと考えられる石材を置いた小形の箱式木棺で、S X07と08の棺の間に納めるように墓壙を穿って構築されていた。

まとめ 大内北3号墳の特徴としては、①自然地形を利用した中型の円墳である、②一墳丘多埋葬の古墳である、③埋葬施設の形態は、竪穴式石室・箱式石棺・木棺と多様である、④古墳の副葬品が鉄器4点と寡少である等があげられる。築造時期については出土遺物が鉄器のみで不明な部分が多いが、おおよそ4世紀後半～5世紀初頭頃に比定される。埋葬施設に関しては、竪穴式石室S X01の墓壙が木棺直葬群の墓壙を切っていることから、木棺直葬から石材を使用した葬法への変遷が窺われる。

今回調査を行った大内北3号墳は、当地域における数世代にわたる有力者の家族墓と想定され、丹後地域の古墳時代前半期の様相を考えるうえで新たな資料を得ることができた。

(辻本和美)



写真1 墳丘の調査(南西から)



写真2 主体部S X01(南から)



写真3 主体部S X06(右下)とS X02(北西から)



写真4 各主体部(左から主体部S X04・07・08、奥側S X05:北東から)

なかやまじょう
3. 中山城跡

所在地 舞鶴市中山ほか

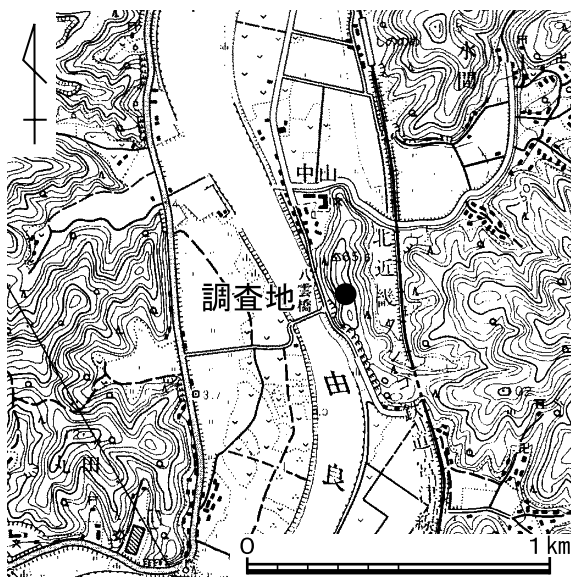
調査期間 平成22年5月10日～10月8日

調査面積 1,800㎡

はじめに 中山城跡の発掘調査は、一般府道西神崎上東線の建設に伴い、平成18年度から実施している。中山城跡は、南北300mの尾根を10本の堀切で遮断し、尾根上を点々と平らに成形して9か所程度の郭を造り、また、やや広い郭の斜面には複数の郭を配置した中規模の城跡である。最も高い郭は標高約60mである。眼下には由良川が流れ、1km南東には一色氏の建部山城を見ることができる。

調査概要 今回の発掘調査は、細長い城の南半部の広い郭周辺で行った。城の中心(主郭)はこの地点の2つ北側の尾根の頂点と考えられる。調査地の最高地点(標高60m)付近には、南北40m、東西17mの細長い平坦面からなる郭1-1がある。その西側斜面には階段状に3つの郭(郭1-2、郭1-3、郭1-4)を造り、防御を固めていた。郭1-1の東側の1段下がったところにも郭1-5を造っていた。郭1-1の南端は1mほど下がっており、郭1-1南と名づけた。

郭1-1の北端には柵1が作られていた。そこから北側へ道が作られていた。その南で掘立柱建物跡4棟を確認した。掘立柱建物跡1は柱穴の遺存状況が悪いが、東西2間、南北4間と推定する。掘立柱建物跡2は東西2間、南北5間で、西廂をもつ。掘立柱建物跡3と掘立柱建物跡4は南北2間、東西2間の総柱建物である。郭1-1南には柵2が作られていた。郭1-2の北側は切岸1となっていたが、細い平坦地が造られ、そこに礎石が置かれていた。おそらく、由良川方面に突き出した舞台か、棧敷のような施設であったと推定する。郭1-3にある掘立柱建物跡

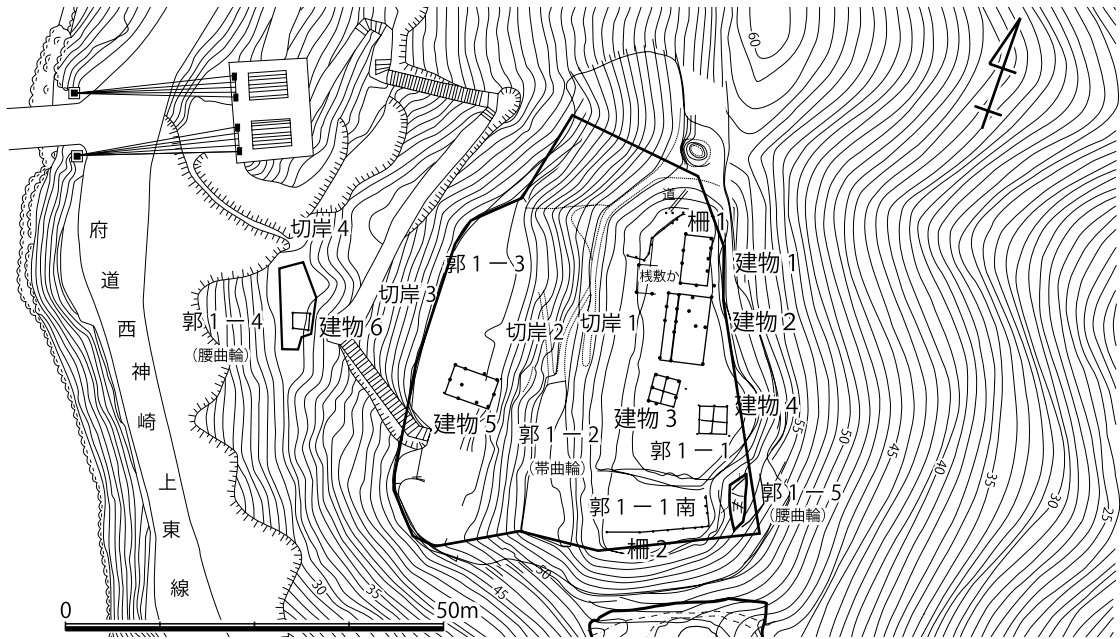


第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 舞鶴)



写真 中山城空中写真(北から)

5は東西3間、南北2間である。郭1-4の中央部に東西1間、南北1間の掘立柱建物跡6が



第2図 調査トレンチ遺構配置図

建てられていた。

遺物は郭1-1ではほとんど出土せず、西側の斜面である切岸1の北部で集中的に出土した。種類は土師器皿、丹波焼甕・すり鉢、越前焼鉢、美濃・瀬戸天目茶碗、中国製染付け・白磁皿などである。郭1-1南では、土師器皿や中国製染付け・青磁碗などのほか、甲冑の部品である鞋こはぜが出土した。もっとも多く出土したのは郭1-4である。土師器皿と、瓦質すり鉢、丹波焼甕、中国の白磁皿・碗、染付け皿・碗、刀の柄頭や、鉄釘などがある。遺物の時代を調べて見ると、戦国時代の後半(16世紀前半)に城は造られ、16世紀後葉に平坦地を広げて造り変えたようである。もっとも新しい遺物は1600年前後の唐津焼や土師器皿である。

中山城に関する同時代の文献はない。周辺に関する史料は、永正17(1520)年に白井清胤が若狭の武田元信から、水間村の支配を命じられているので、16世紀前葉には若狭武田氏の支配下であった可能性があるが、もっとも地域色が出る土師器皿は京都系であり、若狭の影響は認められない。江戸時代に書かれた『一色軍記』をはじめ、いくつかの文書を総合的に検討すると、一色氏が城主であった1579年、織田信長の指示で丹後に攻め入った細川藤孝・忠興、および明智光秀の連合軍によって、まず、建部山城が破られ、一色義道は中山城に逃げ込んだものの、中山城は落城したようである。その後は、細川氏の部下であった沼田氏が城主であったようで、1602年に主君の細川氏が九州の小倉に移ったときに、沼田氏は同行している。

まとめ 中山城は南北に長い城で、いくつかの堀切と急な斜面(切岸)で守られた、いわゆる連郭式の山城である。発掘調査の結果、建物や柵があったことや、城が一度造り替えられ、郭を広げたことがわかった。現段階では、16世紀前半に築造され、おそらく1579年の戦いで一色氏が破れ、その後、細川氏の部下である沼田氏が入り、その時、城は改造された。由良川方面に突き出した舞台、あるいは棧敷のような施設が確認されたことは、細川氏は能や連歌会をしばしば催しており、あるいは、風光明媚なこの地で宴が催された証拠であるのかもしれない。(伊野近富)

へいあんきょう
4. 平安京跡

所在地 京都市中京区壬生坊城町48番地16

調査期間 平成22年4月19日～6月24日

調査面積 350㎡

はじめに この調査は、京都府中京警察(仮称)庁舎建設工事に伴う調査である。調査地は、平安京の条坊復原によると左京四条一坊六町・左京四条一坊十一町、壬生大路に位置する。

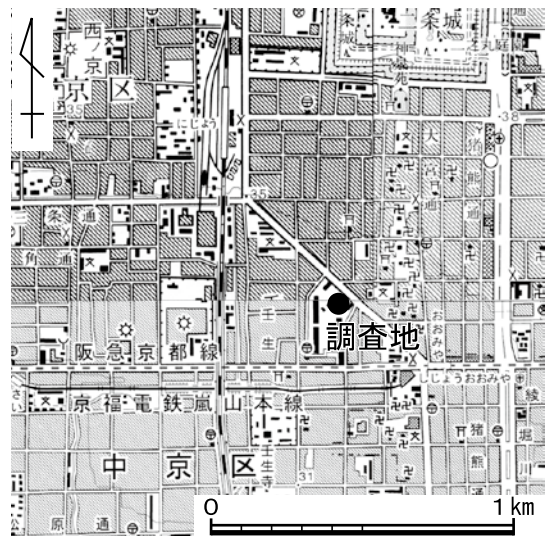
昨年度に実施した調査成果に基づき、調査トレンチを設定した。良好な遺構が検出された1トレンチは北西・南西側に拡張し、2トレンチ側には新たに3・4トレンチを設定し調査を行った。

調査概要 1トレンチでは、地表下1.3mまで市電車庫に伴う攪乱や近・現代の盛土が堆積していた。その下層で厚さ約10～15cmの江戸時代整地層を確認した。整地層下で、黄褐色粘質土の基盤層である遺構検出面を確認し、掘立柱建物跡の一部と思われる柱穴のほか、真東西を意識した溝などを検出した。これらの柱穴からは土師器・須恵器・瓦器・陶磁器の細片が出土した。そのほかに井戸跡を2か所で検出した。S E42は、一辺約1.7mの方形の掘形で、深さ2mを測る。底部分に、0.9m四方の柱材を二分割して転用した井戸枠が残存していた。埋土中より12世紀末～13世紀初めを中心とした土師器、瓦器、陶磁器、箸、曲げ物の底とともに、保延6年(1140)の墨書銘がある題籤軸が出土した。S E174の井戸枠は残存しておらず、直径約1m、深さ2.1mを測る。埋土中より中国製青磁水注、緑釉盤、白磁壺、土師器、須恵器、瓦器、常滑甕・壺、東播系甕・鉢など多くの遺物が出土した。これらは12世紀後葉～13世紀初めを中心としたものである。

3・4トレンチは1トレンチ同様攪乱を受けていたが、その下層で黄褐色粘質土の基盤層を確認した。後世の攪乱により、当初予想された壬生大路東側溝・路面跡などの遺構は検出されなかった。代わって、壬生大路上を東西に横断する13世紀後半と考えられる溝1条を検出した。3・4トレンチとも包含層中からは平安時代の須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦片、中世の土師器・瓦器・陶磁器類の破片が出土した。

まとめ 平安時代後期のこの地は、白川法皇の近臣であった内蔵頭藤原国明の邸宅があった場所とされている。S E174出土の中国製陶磁器や出土品に熱を受けたものが多く、火災との関連や題籤軸に保延6年と墨書があることから、当該地の歴史的背景を考える上で重要な資料となる。

(増田孝彦)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000
京都西北・西南・東北部)

5. 長岡京跡右京第994次・井ノ内遺跡^{いのうち}

所在地 長岡京市井ノ内頭本・今里蓮ヶ糸地内

調査期間 平成22年4月26日～8月27日

調査面積 500㎡

はじめに 今回の調査は、平成22年度主要地方道大山崎大枝線地方道路整備事業に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。

調査地は、南北に約500mを隔てた2か所で調査を行った。西山丘陵裾から東側に延びる標高40m前後の低位段丘上に位置する。長岡京の条坊復原図では、右京三条三坊十五町、三条四坊二町、西三坊大路西側溝が想定される。また、縄文時代から中世の集落跡・館跡を検出した井ノ内遺跡あたる。調査の結果、西三坊大路の路面上に想定される所から奈良時代あるいは平安時代の掘立柱建物跡、古墳時代の竪穴式住居跡、弥生時代の大溝等が検出された。

調査概要 1トレンチは南側の調査地で、今里蓮ヶ糸に所在する。このトレンチでは、竪穴式住居跡や大溝を検出した。竪穴式住居跡は、方形を呈し、深さ0.2m前後を測るが、3棟が重複しているため、平面規模は不明である。住居内から古墳時代後期に属する須恵器・土師器等の遺物が多数出土した。大溝SD04は住居跡の下層から見つかり、溝の方位はN30°E、幅2.2m、深さ0.7mを測り、断面は逆台形を呈する。溝内からは弥生時代後期の高杯・甕等の土器が出土した。

2～4トレンチは、井ノ内頭本地区にある。掘立柱建物跡や柵列を検出した。掘立柱建物跡SB01は桁行3間以上、梁行2間の平安時代の東西棟(方位N2°E)である。柱間寸法は桁行・梁行とも2.6m等間で、柱掘形が一辺0.8～1mを測る比較的大きな建物である。柵列SA04は東西方向(方位N2°E)に延び、6間以上である。柱間寸法は1.2m等間、柱掘形は方形・円形の一辺0.3～0.4mを測る。SB01の北側10mに平行する。そのほか、中世の多数の円形を呈する柱穴が見つかるが、建物跡として復原することはできない。

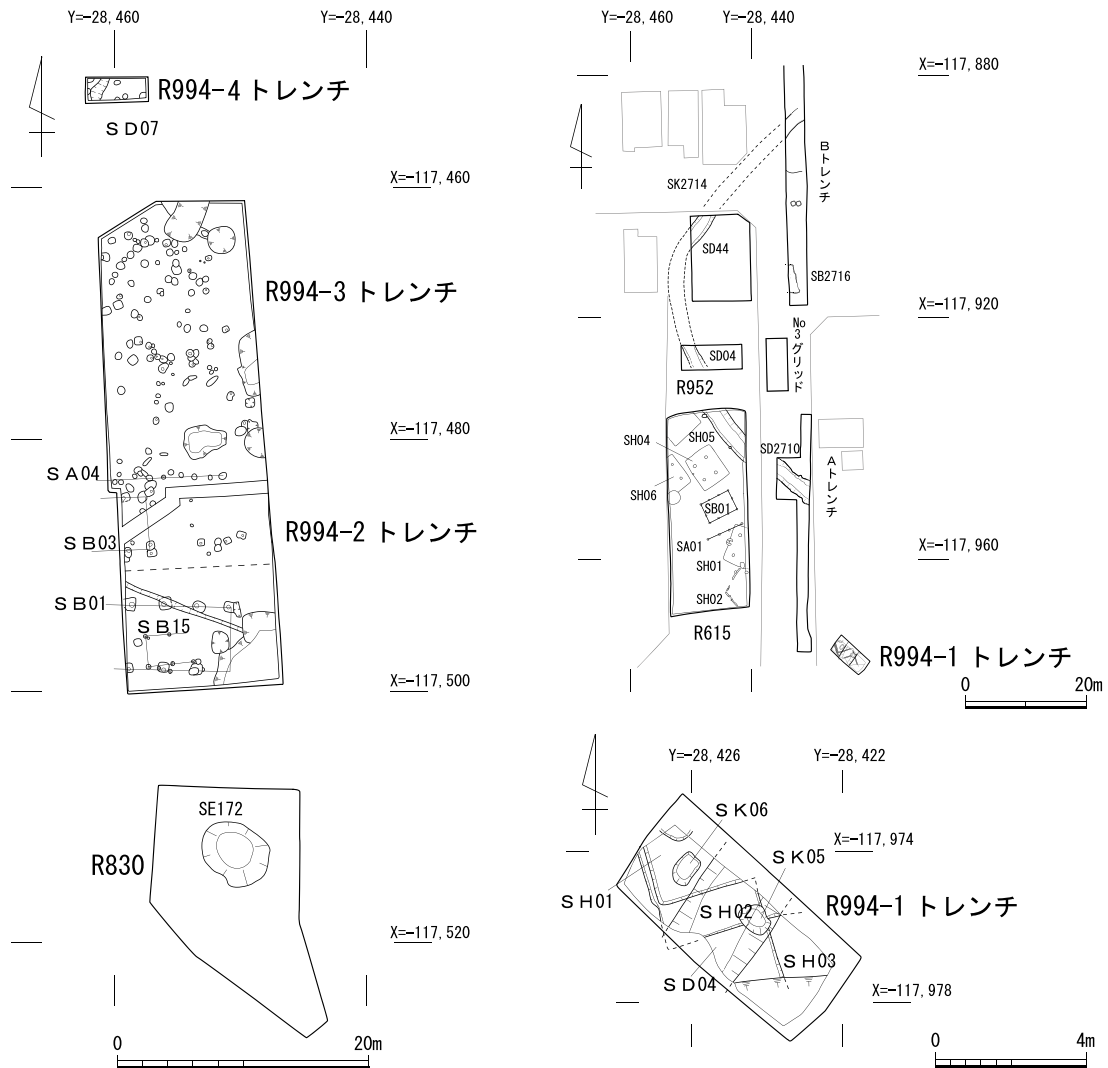


第1図 調査地位置図

(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

まとめ 大溝SD04は、以前に見つかった環濠集落の溝(R27次・R615次・R952次調査)と規模・形態・時期等において類似点が多いが、方向が直交することから、環濠に取り付く溝か、あるいは、別の環濠かは不明である。今後の調査に期待される。

竪穴式住居跡は複数回の建て替えが認めら



第 2 図 調査トレンチ配置図および検出遺構図

れ、近隣の R615 次、R952 次調査の調査成果を併せて考えると、古墳時代後期には大規模集落が営まれたことが分かってきた。

2・3 トレンチは、西三坊大路の西側溝が推定される地点であったが、その痕跡は確認できなかった。その理由として、後世の削平が大いに影響したものと考えられるが、丘陵上にあつて地形に制約を受けているため、条坊が施工されなかったことも否定できない。

また、掘立柱建物跡 S B01、柵列 S A04 は西三坊大路の路面上で見ついている。これらの遺構の時期は長岡京期～平安時代初期の遺構群である。長岡京期であるかどうかの確証は得なかったが、南側 15m に位置する井戸 S E172 (R830 次調査) の存在と合わせて考えると、都城内の宅地や廢都後の集落ではなく、官衙や離宮、あるいは館跡等とも捉えられるものである。

(竹井治雄)

6.長岡京跡右京第995次・開田^{かいでん}遺跡・開田古墳群

所在地 長岡京市開田2丁目

調査期間 平成22年4月26日～6月2日

調査面積 146㎡

はじめに 調査は、平成22年度都市計画道路御陵山崎線地方交付金(街路)事業に係る発掘調査で、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。調査地は、長岡京新条坊では右京六条一坊十五町内の北西部に位置し、そのほかに縄文時代から中世に至る集落跡として知られる開田遺跡、古墳時代後期に築かれた開田古墳群の遺跡範囲内に該当する(図)。調査は、調査対象地内の3か所にトレンチを設定し調査を実施した。

調査概要 第1トレンチでは方墳の周溝と思われる2条の溝を検出した。溝幅は1.7mで、深さは最大50cmである。これらの溝は、南西-北東-南東方向に「L」字に屈曲する溝とトレンチを北東から南西方向に平行して横切る溝で、両溝間の距離から推定すると約12mの方墳に復原できる。溝の断面形は逆台形を呈し、底から須恵器の杯身・杯蓋、土師器の小型甕など古墳時代中期頃の土器が出土した。墳丘および埋葬施設は後世に削平を受けており残っていなかった。

中央部に設定した第2トレンチの遺構面は攪乱を受けており、攪乱の下層から時期不明の斜め方向の溝や土坑などを検出した。北端に設定した第3トレンチでは南北方向の溝2条のほか、長岡京期と考えられる土坑や時期不明のピットなどを検出した。

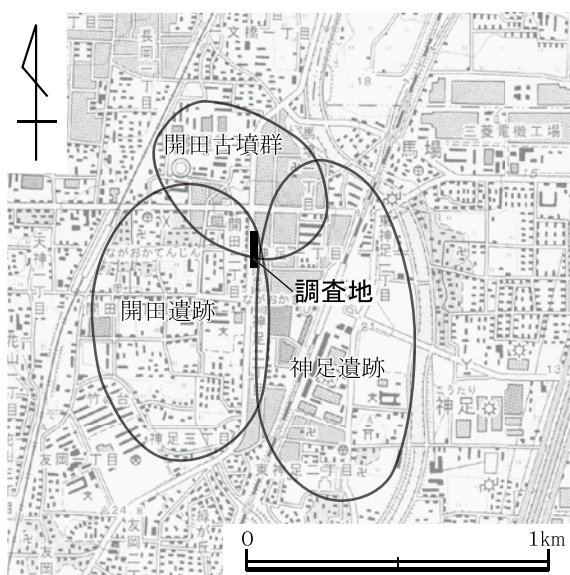
まとめ 長岡京期と断定できる遺構は少なく、遺物も少量の出土であったことから、後世に削平を受けた可能性が高い。しかしながら、方墳の周溝と判断される溝を検出した。墳丘および埋

葬施設は削平されていたが、周溝から5世紀後半から末頃と思われる遺物が出土した。

調査地は開田古墳群の南端部の東羅支群内に位置していることから、この方墳もそのうちの1基と判断され、長岡京市教育委員会より、開田古墳群東羅支群第11号墳と命名された。

開田古墳群および東羅支群内の古墳は円墳と方墳で構成され、築造時期は中期～後期である。今回の調査地点は古墳群の南端部に位置しており、開田古墳群がさらに南側に広がっていく可能性を示唆する成果を得ることができた。

(村田和弘)



調査地周辺主要遺跡分布図
(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

7. 長岡京跡右京第996次・^{かみさと}上里遺跡

所在地 長岡京市井ノ内上印田

調査期間 平成22年4月26日～6月5日

調査面積 125m²

はじめに この調査は、都市計画道路外環状線の建設に先立ち実施したものである。調査地は、長岡京跡の条坊復原では西二坊大路と二条条間大路との交差点の南側路面上にあたり、右京二条二坊三町に隣接する。また、縄文時代晩期から弥生時代前期の集落遺跡である上里遺跡の範囲にも含まれている。隣接する右京第511次調査や右京第547次・第986次調査では、弥生時代前期と推定される流路や、奈良時代～平安時代前期の溝や杭列が検出されている。

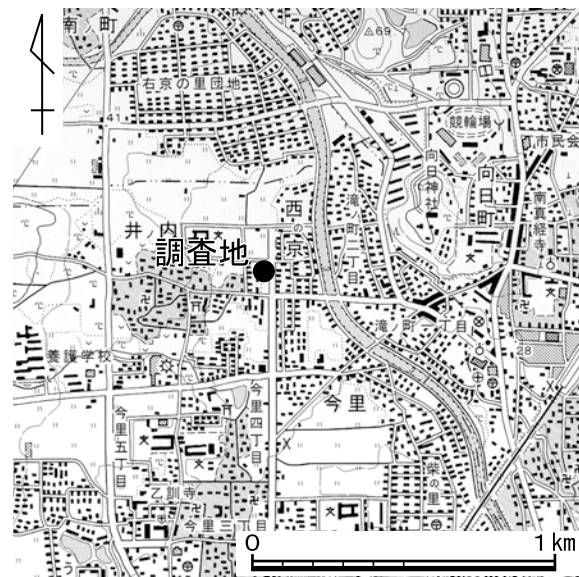
調査概要 調査では、縄文時代晩期から弥生時代前期に形成されたとみられる流路や、奈良時代の溝、さらに中世の土坑や整地面、流路等を確認した。

遺構面は2面で検出し、下層調査では、流路や落ち込みを検出した。流路SD10は、幅約2.5mを測り、流木等の植物遺体が多く含まれるが、土器は出土していない。隣接する第547次調査で検出された流路と検出レベルや方向が類似し、弥生時代前期の溝の可能性はある。

上層調査では、中世の流路や土坑、整地面とみられるSX5、さらに奈良時代と推定される杭列によって護岸された溝SD3とその埋没過程で形成された溝SD1を検出した。溝SD3は、幅約2.4m、深さ約0.5mの東西方向に掘削された溝である。溝の両側では杭列を確認し、横板や棒状の自然木を用いて護岸している。溝の北辺に沿って木杭によって固定された槽が出土した。槽は把手付きで浅い皿状を呈し、長辺に沿って半裁したものを転用して設置し、取水口の水量の調整に用いたと推定される。

まとめ 今回の調査では、奈良時代と推定される杭列溝が特に注目される遺構であるが、この溝と構造的に類似する溝は、調査地北西に位置する右京第22・25次調査でも検出され、奈良時代と推定されている。調査地の南200mの地点では、奈良時代の石敷井戸や廂付き建物跡などが検出され、天皇家供御の菜園である「乙訓園」と推定され、今回検出した溝も関連する水利施設の可能性がある。調査区は、西二坊大路の路面幅の中にあると推定されるが、長岡京期の路面遺構は確認できず、中世以降の削平を受けたと推定される。

(高野陽子)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

8.長岡京跡右京第997次・^{まつだ}松田遺跡

所在地 乙訓郡大山崎町字円明寺小字松田

調査期間 平成22年6月2日～9月29日

調査面積 1,890㎡

はじめに この調査は、京都第二外環状道路建設に先だって実施した。調査地は、大山崎中学校の西側隣接地で、長岡京跡と縄文時代から中世にかけての集落跡である松田遺跡にかかる。右京第933次調査や右京第971・974次調査の成果から、古墳時代後期と中世の集落跡が見つかりと想定された。調査の結果、古墳時代は対象地全域が小泉川の流域や氾濫域で、遺構は存在しなかった。中世には南半部が氾濫域からはずれ、13～14世紀の遺構が確認できた。

調査概要 掘立柱建物跡4棟・柵列2条・井戸2基・土坑3基・配石遺構1基・溝3条を検出した。これらの時期は、出土遺物から主に13世紀のもので、一部14世紀に入る。

掘立柱建物跡S B01 2間(5m)×2間(4m)以上の建物である。礎石を置く柱列と深く掘り込む柱穴列からなる。周辺には、拳大～人頭大の礫を敷く。建物東側にS D86が巡るが、堆積土から建物周囲に巡らされた凹地と考える。その東側には建物に平行する柵列S A76が存在する。

掘立柱建物跡S B02 4間(9.5m)×2間(5m)を測る南北棟の総柱建物である。

掘立柱建物跡S B03 3間(5.9m)×5間(10.3m)を測る東西棟の建物である。建物西側には東柱が2か所に存在し、東側にはほぼ中央に配石遺構S X45が存在する。一辺1mを測る。周囲の石は立て、床の石は平坦に据えてあり、火を受けた痕跡が認められた。また多量の炭も出土した。炉と思われる。建物の西側2間は床貼りで、東3間は土間という構造であったと思われる。

掘立柱建物跡S B04 3間(6.4m)×4間(8.5m)を測る東西棟の建物である。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 淀)

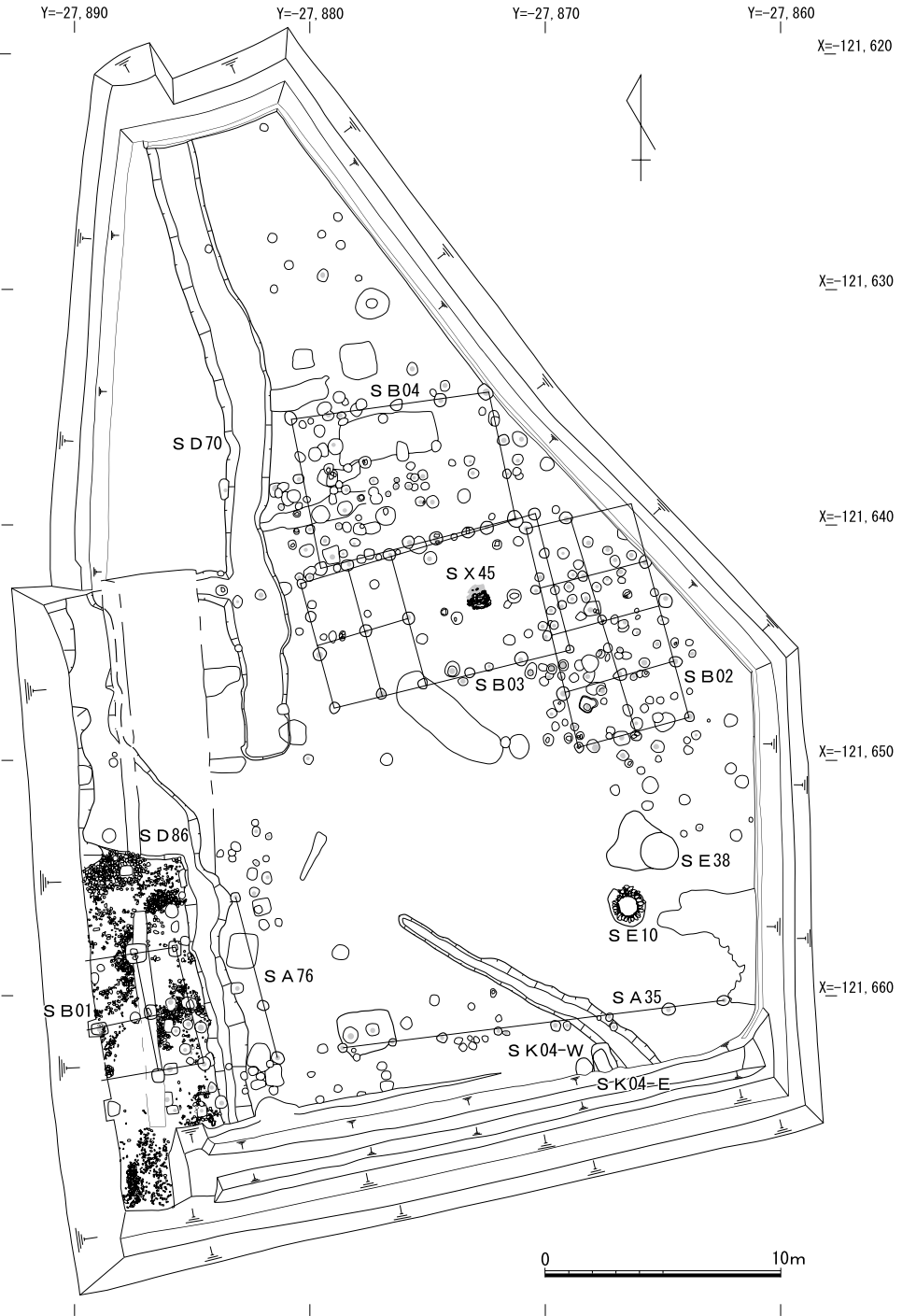
井戸S E10・38 S E10は石組みの井戸で、径0.8m、深さ1.7mを測る。上部は円形に、下部は隅丸方形に、徐々に形を変えて石が組まれていた。石組み下には、方形に木枠を設けていた。一辺0.7mを測る。S E38は、径1m、深さ1.7mを測る素掘りの井戸である。上部は、内側に崩落していた。

柵列S A35 敷地を区画する柵列で、確認長16.2mを測る。

上記の遺構群は、N12°Wを測り、右京第933次調査で検出した12世紀代の建物群に比べて西に大きく振る。今回検出した遺構は、その配置状況から数回の建て替えが行われたと思われる。建物跡

と柵列と井戸などを周囲に配置し、これらの施設によって囲まれた範囲は空閑地であったらしく、柱穴は存在しなかった。空閑地は、一辺13m四方の約170㎡を測る。

今回の調査で出土した土器類は、瓦器 椀・土師皿をはじめ、石鍋、青磁・青白磁・白磁などの陶磁器、銅製の水滴、石製の硯である。出土遺物には、貯蔵容器である甕などは見られない。また、白磁の合



第2図 調査地遺構配置図

子蓋をはじめ、梅瓶の口縁部破片、青磁椀などが出土した。白磁合子蓋は、口径10cm、高さ1.7cmを測り、天井部に牡丹文が施される。類例としては宇治市の白川金色院の経塚から1セットの完形品が出土している。銅製の水滴は平底の壺で、口径1.2cm、体部径3.9cm、底部径3.6cm、高さ2.3cmを測る。

まとめ 今回の調査地付近には、中世の集落が良好な形で残っていることがわかった。白磁の合子蓋をはじめとする輸入陶磁器類の出土は有力者の屋敷地と想定される。また、甕などの貯蔵容器の出土が見られないことは、日常的な施設であったとは考えにくい。(岡崎研一)

9.長岡京跡右京第998次・^{ともおか}友岡遺跡

所在地 長岡京市友岡1丁目2番1号
 調査期間 平成22年5月21日～9月10日
 調査面積 1,200㎡

はじめに 調査対象地は、長岡京条坊復原(新条坊)によれば右京七条二坊二町にあたり、縄文時代～中世にかけての遺跡である友岡遺跡の範囲に含まれる場所である。友岡遺跡の北東部に位置し、隣接地の調査(長岡京跡右京第363次)で奈良時代の溝、中世の柱穴群や土坑、落ち込み、時期不明の井戸などが検出されている。この調査は独立行政法人雇用能力開発機構京都センターの研修棟建設工事に伴う調査である。

調査概要 調査地内で排土置き場を確保するため東西に分けて調査を進めた。調査地の西側で北西方向から南東方向に傾斜した谷状地形と、谷状地形の斜面から土坑、井戸などを検出した。谷状地形には砂礫層、砂礫混入土層、2層の粘質土、灰褐色土などが堆積していた。砂礫混入土層からは奈良時代から長岡京期の土師器・須恵器・土馬・製塩土器などが出土した。粘質土からは奈良時代から中世の須恵器・土師器・布目瓦・瓦器・青磁・白磁の小片、及び輸入銭、田下駄などが出土した。また、鉄滓、炉壁などが多数出土している。加えて弥生土器や縄文時代の石鏃も含まれていた。谷状地形は右京第363次調査で検出された落ち込み遺構SX36308を対岸として計測すると、トレンチ中央部で東西幅25m前後と推定される。

谷状地形の東側斜面では中世の土坑と近世の井戸などを検出した。土坑からは瓦器の小片などが出土している。井戸からは近世の陶磁器が出土しており、近世以降の埋没と推定される。



第1図 調査地位置図
 (国土地理院 1/25,000 京都西南部)

谷状地形の東側では友岡丘陵の砂礫層・粘土層が確認できたが、現代の攪乱が広がり当時の生活面は削られていた。

まとめ 今回の調査で、長岡京に関連する遺構は検出しなかったが以下のことが判明した。

- ①長岡天神の西側から南東方向に張り出した低丘陵上に中世まで存在していた谷地形(SX01)を検出した。昭和28年の地形図に谷地形の痕跡を見ることができる。
- ②埋没した谷の底に堆積した砂礫混入土層に奈良時代から長岡京期の土器が含まれることから、当時谷の周辺には多くの人が生活していたと推定される。出土遺物の中に水辺の祭祀にしばしば用いられる土馬があ

ることから、周辺で祭祀が行われたと推定される。③中世段階には、土師器・青磁・白磁などの小片と田下駄や木杭・板材などが出土する粘質土が堆積した時期があり、谷内が湿地化していた様子がうかがえる。④近世以降には、湿地状堆積層が埋め立てられて水田として利用されていたことがわかった。なお、多量に出土した鉄滓などについては、今



写真 調査地南半 谷状地形全景(東北東から)

回の調査地内で関連した遺構が検出されていないため、工房のあった場所やその時代については判明していない。(石尾政信)



第 2 図 調査地遺構配置図

10. 下馬・片山遺跡

所在地 相楽郡精華町下狛小字下馬・片山

調査期間 平成22年5月25日～8月12日

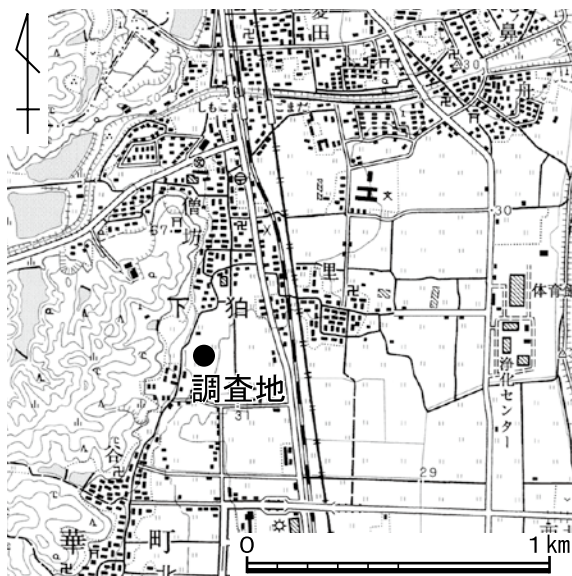
調査面積 700㎡

はじめに 今回の発掘調査は府道木津八幡線道路整備事業に伴って実施した。下馬遺跡と片山遺跡は、木津川左岸の甘南備丘陵東裾の扇状地に所在し、平成21年度から継続して発掘調査を実施している。今回は、下馬遺跡で東西2か所、片山遺跡は1か所で発掘調査を実施した。

調査概要 下馬遺跡では、西側の調査区から平安時代後期の素掘り井戸1基と中世の柱穴・溝を検出した。東側に隣接する調査区では、奈良時代と平安時代後期から鎌倉時代の2時期の遺構面が存在した。下層の奈良時代遺構面では、素掘り井戸1基と土坑・溝を検出した。上層の遺構面では、平安時代後期に属する2基の井戸を検出したほか、調査区南東隅から南北に延びる柱穴列と溝を検出した。柱穴列は3間分を検出したが調査区外に延びる可能性もあり、掘立柱建物跡か柵列かの詳細は不明である。溝内からは12世紀後半から13世紀の遺物の出土をみている。

片山遺跡の調査区は、下馬遺跡東側調査区の南東、前年度A1地区の東隣に位置する。前年度調査で検出した2棟の掘立柱建物跡の一部柱穴のほか、新たに2棟の掘立柱建物跡を検出した。検出した4棟の掘立柱建物跡の方位は座標軸にほぼ合致し、出土遺物から奈良時代の建物跡と考えられる。このほか、平安時代後期から鎌倉時代の柱穴・土坑・溝等の遺構を検出した。

まとめ 下馬遺跡は、これまでの発掘調査から縄文時代晩期～室町時代の複合遺跡であり、遺構・遺物の状況から、平安時代後期～鎌倉時代と室町時代を中心とする遺跡であることが明らかになった。平安時代後期頃には遺跡東部に集落が広がり、掘立柱建物跡や柵列・井戸・溝等の遺



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 田辺)

構が存在した。また、丘陵裾部から土師器と瓦質の火舎・丸瓦・平瓦が出土しており、室町時代の寺院関連施設が存在したとみられる。遺跡の東部では、平安時代後期から鎌倉時代の掘立柱建物跡・柵列・井戸・溝等の集落関連の遺構の分布が認められる。

片山遺跡は、弥生時代～中世の遺跡である。主要遺構として奈良時代の掘立柱建物跡4棟・土坑・溝等を検出した。弥生時代では、溝内から石包丁の出土をみている。遺跡周辺部に弥生時代の集落が存在する可能性がある。

(竹原一彦)

発見と考古学

今回の発掘余話では、「発見と考古学」と題して、5本の小文を紹介します。

発掘調査を続けていくと、これまでに見たことも経験したこともない遺構・遺物に遭遇する時があります。そのような遺構が、専門家やさまざまな分野の方々のご教示によって、その遺跡の調査をしている間に運良く解決する場合がありますし、その遺跡の調査報告書が刊行された後に、よく似た遺構・遺物が各地で見つかりその性格が判明する場合があります。

長岡京市伊賀寺遺跡では、細かく砕けた骨が多量に出土した遺構を見つけた際の顛末を紹介しています。見つかった最初の段階では、何の骨とも分からなかったのですが、人類学教室の先生に見ていただき縄文時代に火葬された骨であることがわかりました。

久御山町市田齊当坊遺跡の弥生時代中期前葉の木組みの井戸は、すり鉢状に大きく掘り込まれたもので、地表下1.5mまで掘削してやっと井戸側が見つかりました。井戸と言えば筒状の堅坑の形状を思い描きますが、この井戸はすり鉢の途中にあるテラスに降り立って水を汲むものでした。国内には類例がなく、遠く、朝鮮半島の遺跡とのつながりが窺える井戸です。

京丹後市弥栄町奈具岡遺跡の玉作り工房では、ひとつの遺物の発見が遺跡の評価を変え、ひいては調査の方法自体をも大きく変えた調査となりました。最初の頃は弥生時代にごく普通にみられる竪穴式住居を中心とした集落として調査を進めましたが、ある日の作業の休憩中に偶然見つけた遺物が大発見のきっかけとなりました。それ以後、土を洗浄することで、多量の玉製品と原材料、玉道具が出土し、当時の玉作り技術の解明に大きく寄与することとなりました。

舞鶴市志高遺跡では、貼石墓と船着き場を調査した時の担当者の戸惑いを紹介しています。貼石墓の調査では、検証作業を繰り返して何とか納得のいく評価にたどり着きましたが、突堤状の石組遺構はその性格がわからない遺構でした。ところが、最近の調査で、壱岐原ノ辻遺跡と同様の遺構が船着き場として評価されており、志高遺跡の遺構も船着き場としての評価が定まっています。現地調査が終了し報告書を刊行した時点でわからなかった遺構の性格が、その後の調査事例で明らかになった事例となりました。

木津川市瓦谷1号墳と西山塚古墳の埋葬施設からは漆膜の残った鞆と盾が見つかりました。いずれも現地調査中に細部を洗浄して詳細に観察するには限界がありました。そのため、室内に持ち帰る必要があり、発泡ウレタンを利用して漆膜の残った鞆と盾を取り上げることにしました。その時の苦勞とアクシデントを紹介しています。室内で観察した結果、漆膜の背後に皮の一部が残り、繊維の織り方などを詳細に観察できました。

日頃、発掘調査ではいろいろな発見が繰り返されていますが、あまり表に出ない担当者の戸惑いや悩み、試行錯誤を読み取っていただけたら、と思います。(石井清司)

縄文時代の火葬骨（伊賀寺遺跡）

それは、平成20(2008)年の7月、長岡京市下海印寺下内田で伊賀寺遺跡を調査している時でした。土坑の中に細かな骨が乱雑に埋められて、その上にはほぼ完形の土器が置かれていました。土坑の埋土からは縄文土器片がパラパラと出土します。縄文時代のものにしては骨の残り具合が非常に良く、とうてい、数千年前の古い時代のものとは思えません。しかし、まず、人の骨なのか、犬・猫の骨なのか、それを明らかにすることが第一の問題でした。

そこで、京都大学理学部人類学教室の片山一道教授(当時)に連絡し、現地に来ていただきました。先生は骨を一見しただけで「ヒトの骨です」と鑑定されました。理由をお伺いすると、「ヒトの骨は動物の骨に比べて、華奢でまっすぐです」と簡便に教えていただきました。また、骨にヒビが入っていることから骨の中の水分がまだ抜けきらない段階の新鮮な遺骸がかなり高温で焼



写真1 片山先生の視察状況（暑い日でした）



写真2 掘り下げの作業（少し変な臭いがしました）



写真3 人骨の状況（小さくて表面にひびがあります）

かれていること、複数体が認められること、骨がたくさん集められているからこそ長い年月を経ても骨が残ったのだらうこと、などを伺いました。

その後、小区画毎に骨を取り上げていきました。土器は下の面に注口があり、縄文時代の注口土器であることがわかり、遺構の時期が確定しました。

土はすべて持ち帰り、土を洗って骨を回収したところ、小さな骨が主体で計約10kgありました。

調査終了後、片山先生の研究室の大藪由美子さんに個体数を数えていただきました。大人8人、子供2人が葬られていたことが分かりました。

実は、縄文時代の火葬骨は、東日本を中心に見つかっていますが、類例は多くありません。また、この事例のように死亡直後に焼かれたものではなく、乾燥した骨が火を受けたものばかりです。丁度枯れ木を焼いたように、黒く焦げた状態です。そのため、土壙墓に埋められた遺骸を掘り返して、違った場所に埋め直す際に、たまたま残っている肉を焼き切ったものと考えられています。

伊賀寺集落の縄文人はなぜ死亡直後に焼かれたのでしょうか、彼ら10人は一度に亡くなったのでしょうか、その原因は。この墓の調査は終了しましたが、新たな謎が提議されました。(岩松 保)

日本最古の木組みの井戸 いちださいとうぼう（市田齊当坊遺跡）

山城盆地の中央には、かつて巨椋池おぐらいけと呼ばれた巨大な池がありました。現在は干拓地になっていますが、宇治川や桂川、木津川の遊水池となった湖沼で、渡し舟が往来したというその風情は万葉集にも詠まれています。この旧巨椋池南部の久世郡久御山町域で第二京阪道路の建設に伴う発掘調査を実施し、府内最大級の弥生時代中期の集落、市田齊当坊遺跡が見つかりました。調査では、環濠とみられる大溝や竪穴式住居跡群、方形周溝墓群などが確認されましたが、そのなかでもひとときわ注目されたのは木組みの井戸でした。

弥生時代に大陸から伝えられた井戸は、環濠集落での飲料水や手工業生産の用水、あるいは集落内での祭祀のために掘られたと考えられています。その形態は、現在のものと同様、縦に深く掘られた筒状の掘形をもつものが一般的です。しかし、市田齊当坊遺跡の井戸は、こうした形態とは大きく異なっていました。

楕円形の大形の土坑として掘り始めたところ、弥生土器ばかりが出土します。掘り進むうちにすり鉢状の形状になることがわかりましたが、遺構の性格はまだわかりませんでした。地表下約1.5mに達したところで、ようやく木組みの構造物を発見しました。約50本の縦板を正方形に打ち込み、ホゾ穴結合で組む横板によって縦板を内側から固定していました(写真2)。それはまるで、奈良時代の遺跡でみられる木組み井戸のようで、本当に弥生時代の井戸でよいのか、皆は半信半疑でした。調査員らの驚きと困惑をよそに、木枠の中の土砂を取り除くと、2000年以上の時を経て滾々と清らかな水が湧き出しました。

市田齊当坊遺跡の井戸の時期は弥生時代中期前葉で、近畿地方では素掘りや丸太割り抜きの井戸がようやく作りはじめられた段階です。そして、「縦板横棧止め」と呼ばれる木組構造を持ち、人が降り立つためのテラスを設けた、他に類を見ないものです(写真1)。

この発見で、弥生時代には現在でも見られるような筒状の竪坑の井戸だけではなく、すり鉢状の掘形の中段に降りて水を汲み上げる井戸があることがわかりました。また、木組みの井戸側は完成された形態で、国内にその系譜を求めることは難しい資料でした。しかし、大韓民国忠清南道論山市麻田里遺跡で無文土器時代の同様な木組み井戸が見つかり、朝鮮半島との関わりが注目されるようになりました。(高野陽子)



写真1 テラスは板材を埋め込み補強されていました



写真2 井戸側内部の状況

方形貼石墓と船着き場の発見（志高遺跡）^{しだか}

1986年秋、舞鶴市志高遺跡の調査中に、古墳時代前期の包含層を除去した時点で、二つの見たことのない遺構に遭遇しました。一つは全長11mに及ぶ一列の列石で、もう一つは自然流路に向かって突堤状に突き出す50mに及ぶ長大な石組遺構です。

列石は、溝の斜面上部に穴を掘り、そこに人頭大の石を平たい面を上にして埋め置いています。前年、京丹後市弥栄町奈具岡遺跡で検出された不明遺構（現地説明会では中世の基壇などの可能性があると説明されていました）と類似性が高いことから、祭壇のような施設と想定して調査を進めました。上面の土坑からは意図的に一部を打ち欠いた弥生土器が出土し、墳墓かとも思いました。その後、石列と溝を挟んだ反対側の斜面でも貼石が見つかり、これは全長15.5m、高さ0.7mで、コの字状に曲がりました。ここに至って、1983年に京丹後市大宮町で調査され、弥生時代中期の貼石をもつ方形台状墓とされた小池13号墓との共通性に気づきました。最後に、斜面上の平坦面で埋葬施設を検出し、これらの列石が3基の貼石墓の斜面にあたる事が判明しました。

弥生時代中期の墳墓に石を貼る墓制は、島根県や広島県北部の方形貼石墓や四隅突出型墳丘墓が知られていました。この発見で近畿地方北部にもよく似た墓の存在が明らかとなりました。現在では、前述の奈具岡遺跡を含め、8遺跡13例が確認されています。



写真1 方形貼石墓全景

一方、貼石墓群に隣接して検出した突堤状の石組遺構は、自然流路の傾斜にそって流路中央部に向かって延びています。全長はほぼ50m、幅は場所により異なりますが、貼石墓側の基部で1.5m、中央の25m地点で7.0m以上、遺構の断面はかまぼこ型で、高さは1.0～1.5mです。



写真2 突堤状の石組遺構（奥側に方形貼石墓）

多くの研究者に見てもらいましたが、この遺構はよくわからないとの意見が大多数でした。中には少数ですが、墳墓遺構、灌漑施設、船着き場といったご意見をいただきましたが、全く決め手がありませんでした。調査を担当した者としては、貼石墓群のすぐ横にあることから、その性格は不明としながらも墳墓関連の遺構の可能性が高いと考え、報告書にもそう記しました。

ところが、1996年にこれとよく似た遺構が長崎県壱岐市の原ノ辻遺跡で検出され、弥生時代の船着き場であることが明らかとなりました。

調査から10年経ち、やっと胸のつかえが取れた思いでした。（肥後弘幸）

玉作り工房跡の発見（^{なぐおか}奈具岡遺跡）

今から20年ほど前、現在の京丹後市において丹後国営農地開発事業が計画され、大規模な発掘調査が実施されました。各遺跡で数多くの成果を得ることができましたが、ここでは、その一つである奈具岡遺跡での出来事と舞台裏にふれてみたいと思います。

奈具岡遺跡は、竹野郡弥栄町溝谷（現京丹後市弥栄町）にあり、弥生時代中期の玉作り工房跡として知られています。碧玉製・緑色凝灰岩製管玉未製品をはじめ石針など微細な遺物が、竪穴式住居跡や土坑内から出土しました（写真1・2）。これらの遺物をもとに、水晶製玉作りや碧玉製・緑色凝灰岩製管玉の生産、石針の製作工程についての研究が進められました。

しかし、調査を着手した時にはこのような玉作り関連の遺物が出土するとは思っていませんでした。近隣の遠所遺跡群で多く見られたような、丘陵の緩傾斜地に築かれた住居跡が見つかるだけと考えていました。

ある日、丘陵中腹の作業員の方々と休憩をしている時でした。地面に光るものがあるのに気づきました。何気なく手にすると瑪瑙製の石針で、1cm以上の長さがありました。試掘調査時にも玉作り関連の遺物が出土していました。これがこの後の大発見のきっかけとなりました。

それからは、竪穴式住居跡の床面直上の土をすべて洗浄するなど、発掘調査はにわかにながかりなものとなりました。堤を築いて水を溜め、作業小屋を作り（写真3）、ポンプアップした水で土を洗浄し乾かしました。雨天の日や夕食後に洗浄された砂粒の中から石製の未製品や薄片をピンセットで採取するという作業を数か月間続けました。この時の成果をもとに、玉の製作工程が復元されるに至ったのです。また、この調査でのノウハウが、これ以後に玉作り遺跡を調査する際の方針と方法になりました。これらの出土遺物は平成16年に国の重要文化財に指定されました。（岡崎研一）

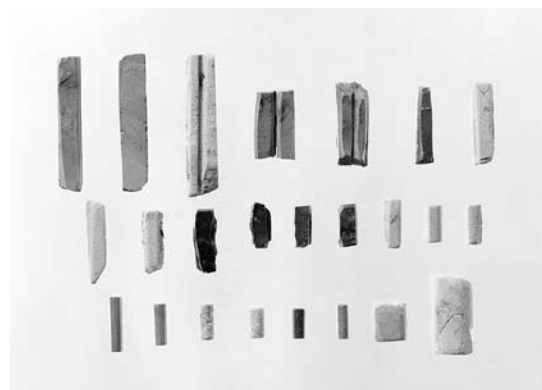


写真1 緑色凝灰岩製玉類

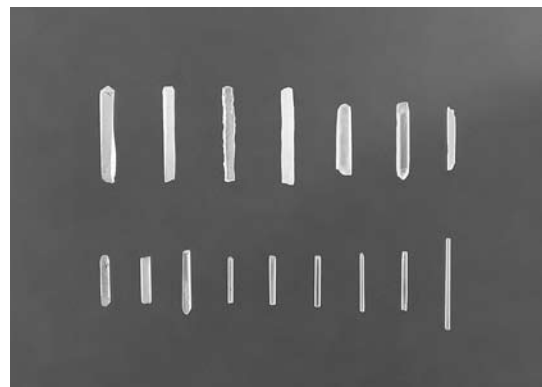


写真2 瑪瑙製石針



写真3 遺構内土砂洗浄状況

漆塗り製品の調査 かわらだに (瓦谷1号墳・西山塚古墳) にしやまづか

古墳の埋葬施設を調査していると、ときどき非常に脆弱な出土品に出会うことがあります。近年の発掘調査の技術と精度の向上は、従前ではややもすると見落としてしまうような「モノ」を精確に捉えることができるようになりました。その一つに、漆塗り製品を挙げることができます。当調査研究センターでは、木津川市に所在する二つの古墳の調査で、埋葬施設に副葬された漆塗りの武具を相次いで調査しました。

一つは、瓦谷1号墳の埋葬施設(第2主体)の箱式木棺の副室に据え置かれた状態で見つかったゆき鞞と呼ばれる矢を入れる容器です(図右)。今一つは、その2年後に調査を実施した西山塚古墳の埋葬施設(第1主体)の箱式木棺の蓋の上に乗せられた盾(図左)です。どちらも木製の枠や棧で骨組みを作り、表面には皮革が貼られています。

実は、これらの資料は、発掘調査の時点では漆の皮膜しか遺存していませんでした。鞞や盾の本体部分の木質は、地中では非常に残りにくいものです。そのため、鞞や盾の表面に化粧された漆の皮膜だけが土に貼り付いて検出されたのです。こうした薄い皮膜を壊さないで取り上げることは非常に難しく、過去に何度か取り上げに失敗した事例が報告されています。

このような遺物を取り上げる場合、漆の皮膜を周りの地面ごと切り取り持ち帰ります。その際、周囲の土壌が崩れてしまわないように、発泡ウレタンで切り土を厚く包み込んで保護します。

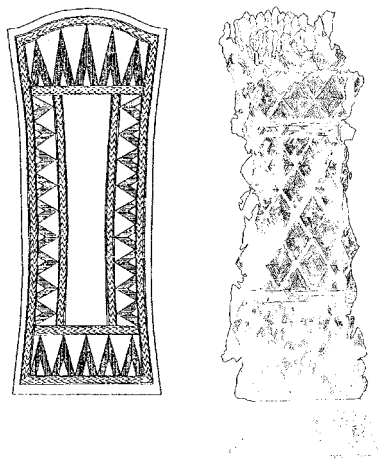


図 漆鞞・盾実測図(復元図)

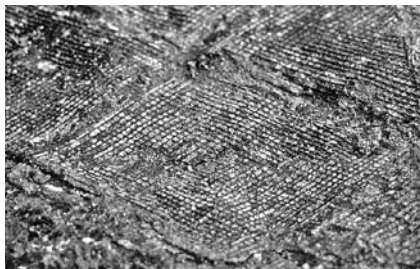


写真 漆鞞の漆皮膜に残る織物

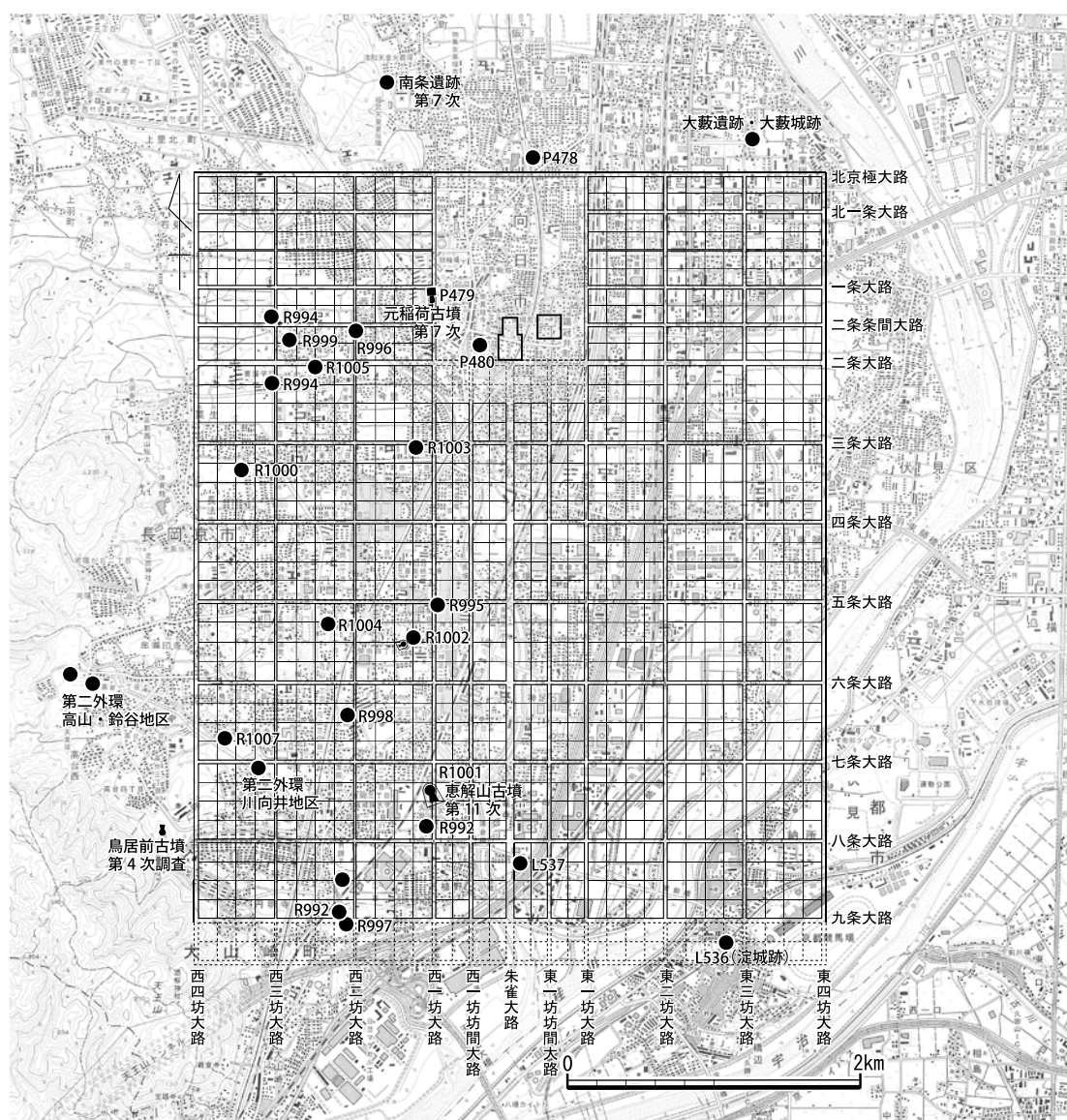
ところで、鞞の取り上げ作業中に事件が起きました。本体が傷まないようウレタンを流し込む穴を周囲に掘削している時、土の一面に亀裂が発生し、それがみるみる広がって、崩壊し始めました。たまたま作業していた学生の身体が間に入り、支えとなって完全な崩壊は免れました。一方、盾は棺の上に置かれていたため、木棺の腐朽に伴い棺の内側に落ち込み、漆の皮膜は引き裂かれてバラバラになっていましたが、こちらはうまく取り上げることができました。

さて、室内でクリーニングし詳細に観察すると想像もしていなかったことがわかりました。漆皮膜に鞞・盾の表面を覆った織物の模様が鮮明に残っていたのです。鞞は、菱形文様が織り出された織物を皮革生地の上に被せて、表面を黒漆で塗り固めていたのです(写真)。一方、盾は、菱形と三角形の文様が表された刺繍が、素地の皮革に直接施され、表面を黒漆掛けして仕上げられていました。いずれも当時の紡織技術や刺繍技術の水準の高さを如実に示す重要な資料となりました。

(伊賀高弘)

長岡京跡発掘調査の情報交換及び資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成22年6月から9月の例会では、宮域3件、左京域2件、右京域15件、京域外5件、あわせて25件の調査報告があった。そのなかで、主要な事例について報告する。

宮域 宮跡第478次調査(向日市寺戸町)は、宮域北限の半町北に位置し、推定長岡京期の東西方向の柱列が2条検出された。北側柱列の柱筋は北京極大(小)路北側溝から240尺に位置することが判明した。宮跡第479次調査(向日市向日町)では、元稲荷古墳の墳丘西側くびれ部の詳細な



調査地位置図 (1/50,000)

(向日市文化財事務所・(財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

構造を明らかにした(前号参照)。宮跡第480次調査(向日市鶏冠井町)では、近代の石塔寺北端道に関連する石組み暗渠と、その北側で整地造成を伴って多くの柱穴等が検出された。出土遺物に奈良時代の土器や瓦類が含まれ、既往の調査で確認されている朝堂院西方の官衙、あるいはそれに先行する時期の官衙(乙訓郡衙)との関連が指摘された。

左京域 左京第536次(京都市伏見区)では、江戸期の淀城本丸に関連する堀跡、及び築城直前まで機能していた大坂街道の道路遺構(路面と側溝)とそれに面する町家の跡が検出された。

右京域 右京第992次調査(長岡京市久貝)では、長岡京期から平安時代にかけての土坑が検出された。右京第999次調査(長岡京市井ノ内)では、古墳時代の土坑墓が2基検出された。1基の墓壙の中央部では、須恵器の杯身・杯蓋(TK217)が完形で据え置かれていた。右京第1000次調査(長岡京市今里・長法寺)では、長岡京期の掘立柱建物跡3棟と和同開珎が検出された。右京第1001次調査(長岡京市勝竜寺)は、乙訓地域最大規模の前方後円墳である国史跡恵解山古墳の第11次調査として実施された。調査の結果は現地説明会で広く公開された。前方後円墳の東側の造り出しでは、区画石列で囲まれた礫敷き遺構が検出され、周囲から家・蓋・水鳥などの形象埴輪が出土した。西側造り出しでは前方部との接続部で埴輪列を検出した。このほか、周濠の外周で外堤の内傾斜面を確認した。右京第1002次調査(長岡京市開田)では、六条条間小路の南側溝とこれに平行して隣接する屋舎内に甕据え付け穴をもつ掘立柱建物跡が検出された。右京第1003次調査(長岡京市今里)では、長岡京期の南北溝が1条検出された。右京第1005次(長岡京市井ノ内)では、平安時代の溝状土坑、中世の円形ピットや井戸状土坑と、古墳時代の遺物を含む包含層が確認された。右京第1006次調査(長岡京市調子)では石組み井戸や柱穴、弥生時代の土坑が検出された。右京第1007次調査(長岡京市下海印寺)では、昨年度発見された中世の方形堀を巡らせた居館の追加調査が始まった。

京域外 鳥居前古墳(大山崎町円明寺)は、銅鏡(画文帯神獸鏡)や玉類・鉄製武器・武具類などが副葬された竪穴式石室(石槨)を内部主体とし、段築成された墳丘には葺石と埴輪列の外部施設を備えた古墳時代前期末の前方後円墳である。第4次調査では、墳丘を南北方向に縦断する崖面を利用した調査が実施された。その結果、墳丘盛土はほとんど確認されず、その大半は地山を削り出して成形されているとともに、東側で確認されていた前方部最下段(付加段)は、前端側には回り込まず、部分的な造作であることが判明した。また、後円部(3段築成)に対して低くて短い前方部が後円部に取り付く、前期的要素をもつ前方後円墳であることがわかった。鈴谷遺跡(第二外環鈴谷地区:長岡京市高山)では、古墳時代終末期(=飛鳥時代)の小規模な横穴式石室の調査が行われ、副葬品として須恵器の蓋杯(杯B)2セットと土師器小型甕が出土した。同じ調査区から、古墳時代前期の家形埴輪や土馬等も出土している。大藪遺跡・大藪城跡(京都市南区)では、室町時代の方形に巡る堀に囲まれた屋敷地が確認され、内部から柵により囲まれた建物跡がみられた。「花の寺」として知られる勝持寺旧境内とその隣接地の調査(京都市西京区)では、「九十九坊」と称する子院と推測できる平坦面と建物跡や土壘状遺構が検出された。

(伊賀高弘)

普及啓発事業（7月～10月）

当調査研究センターは、京都府内で国や府等が行う公共事業により消滅する埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくために、発掘調査現地説明会・埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会・出前授業(体験学習)等の普及啓発活動を行っています。

さて今年度は、昭和56年4月に当調査研究センターが発足して30年の節目にあたります。例年開催している埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会の趣を替え、創立30周年を記念した講演会や展覧会を開催しました。

記念展覧会

当調査研究センターの設立30周年を記念した展覧会を平成22年8月14日(土)から9月20日(月)までの間、向日市文化資料館企画展示室の一部及びラウンジで開催しました。

今年、平城遷都1300年祭が史跡平城宮跡を中心に盛大に行われ、奈良時代が脚光を浴びています。そこで、京都府内の奈良時代に焦点をあてた展覧会「天平浪漫紀行・京都」を開催しました。展示方法も趣向を凝らし、娘と翁二人が平城京から恭仁宮、南山城、南丹、中丹、丹後、そして終着の長岡京へと旅をしながら、京都府内の遺跡を探訪し、奈良時代の国府や官衙、古道、瓦や土器の生産遺跡、条里遺跡やさまざまな遺物に巡り会うという展示を行いました。展示の中では、出土遺物や写真パネル、早川和子氏のイラスト画や説明板を多用し、奈良時代の京都を描き出すよう心がけました。

全国で3例目となる万葉歌木簡が出土した馬場南遺跡では、歌木簡が保存処理後初めて展示されたこともあり、多くの方が足を止めて見入っておられました。「神雄寺」「大殿」などと書かれた墨書土器、三彩陶器や山水が表現された彩釉陶器、多量に出土した灯明皿など、古代寺院跡としては特異な遺物をところ狭しと展示しました。また普及啓発コーナ



30周年記念展覧会観覧状況（ラウンジの展示）



30周年記念展覧会観覧状況（企画展示室の展示）

ーでは、5年毎の節目にあたる年に開催した記念講演会や展覧会をパネル展示し、20年・25年前の若かりし発表者や展示品に思いを馳せていました。さらに、出土遺物等をモチーフにした塗り絵・プラ板作りコーナーも併設し、連日子供達で賑っていました。

約1か月の開催期間中、前半は記録的な猛暑日が続きましたが、北は青森県、南は熊本県まで遠方の方々にも観覧していただき、総入館者数は2,208名を数えました。

埋蔵文化財セミナー

第116回埋蔵文化財セミナーを平成22年7月3日(土)に八幡市生涯学習センターで、「京都の後期古墳」と題して実施しました。綾部市教育委員会の三好博喜氏から久田山古墳群B支群の報告があり、未盗掘の古墳については、当時の埋葬状況を知る貴重な成果報告であり、またトータルステーションを用いた3次元座標からの等高線の復原、物理探査による古墳の検出など興味深い発表をしていただきました。

続いて、当調査研究センター引原茂治主任調査員による女谷・荒坂横穴群の調査成果では、広く点在する横穴墓と、後世にも再利用された横穴墓の発表がありました。大住隼人が居住した南山城地域に分布する横穴墓は、隼人の出身地である南九州地域に広く分布する横穴墓と何らかの

関係があるという説もありますが、今回の調査からは結びつける資料は得られませんでした。



埋蔵文化財セミナー講演（三好講師）

また、当調査研究センターの筒井崇史調査員からは「京都の後期群集墳」と題して、丹後、中丹、南丹、京都市、乙訓、南山城の府内各地域の群集墳から、その特質や古墳の築かれ方等について報告がありました。

当日は朝から雨が降り続き、足元の悪い中での開催ではありましたが、74名の参加者を数え、盛況裏に終えることができました。

記念講演会

設立30周年を記念して、展覧会と同じテーマ「天平浪漫紀行・京都」と題して、平成22年9月4日(土)向日市民会館ホールで開催しました。上田正昭理事長の「聖武天皇と天平文化」と題した講演では、奈良県では平城遷都1300年祭が行われているが、恭仁宮は平城京から天平12(740)年に都が遷され、わずか3年余りの都であっただけですが、万葉集にも詠まれる風光明媚な土地柄であること、大仏建立の詔が恭仁宮で発布されるなど、天平文化の中心であったことを京都の人は確認してほしいとの前置きのもとで、恭仁宮遷都と橘諸兄の関係、消し去られた寺院「神雄寺」について講演いただきました(別掲講演記録)。

菱田哲郎京都府立大学教授からは「天平の寺とものづくり」と題して、神雄寺と墨書された土器や多量の灯明皿が出土した馬場南遺跡について、神雄寺の立地や寺院配置の構成はそれまでの寺院とは大きく異なり、泉から流れる流路を利用して法会が営まれたことを指摘され、天平の頃に寺院に泉が意識されはじめたのではと講演されました。またものづくりにおいても、この時期に生産の規模や内容に革新があったと指摘されました。



記念講演会（菱田先生）

この後、当調査研究センター松尾史子・筒井崇史両調査員が、同時開催している記念展覧会の見どころを、プレゼンテーション・ソフトを用いて解説しました。

当日は9月にもかかわらず猛暑日でしたが、参加者は210名を数え、京都の天平ロマンに思いを馳せていただき、盛況裏に終えることができました。

「遺物に学ぶ」考古学講座

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿地区の法人が中心となり10月の第二土曜日を「関西考古学の日」と銘打って、9月から11月の3か月間、各組織で各種イベント等を開催し、各地域の遺跡に親しんでいただく企画を行っています。当調査研究センターではこの間、計8回の考古学講座「遺物に学ぶ」を開催することとなり、10月までに5回の講座を行いました。



関西考古学の日 「遺物に学ぶ」（伊野講師）

第1回の講座では、『桃山陶器の世界』と題して、桃山陶器の見方や系譜、そして、その美しさを伊野近富次席総括調査員が力説し、第2講座は、『朝鮮半島からきた陶質土器』と題して、京都府内より出土の陶質土器について小池寛課長補佐が解説しました。第3講座は、『縄文時代の主食、ドングリを語る』と題して増田孝彦主任調査員がドングリの採取から保存、料理（製品）の工程を楽しい試食を交えながら報告しました。第4講座は、『近



関西考古学の日 「遺物に学ぶ」（引原講師）

世陶磁器は語る』と題して引原茂治主任調査員は、たくさんの出土品を目の前にして、江戸時代の食器・茶器について講義しました。第5講座は、『木器からみた古代の生活復元』と題して戸原和人主任調査員から流路内や古墳の周溝内から出土した木製品について、実物を目の前にして、できるだけ詳しく、わかり易く説明するよう心がけました。会場の関係で、各講座とも定員30名、事前申し込みで実施しています。

現地説明会

舞鶴市中山城跡は、南北300mの尾根を複数の堀切で区切って郭を配置した連郭式の山城です。一色氏が城主であったと伝えられ、細川・明智連合軍により落城し、1600年頃までは細川氏の武将が城主として存続しました。調査では、建物跡や柵を検出するとともに、郭を広げる改築を行ったこともわかりました。また、遺物から16世紀前半に築城され、17世紀初頭に廃絶したと考えられます。8月28日(土)に現地説明会を開催し、地元の歴史や戦国期の城跡に興味を持つ93名の方々に、標高60mの見晴らしの良い郭に登っていただきました。

松田遺跡は、小泉川によって形成された扇状地に広がる、縄文時代から中世に至る集落跡です。



大内北古墳群現地説明会

今回の調査では13・14世紀代の集落跡を検出し、中国製の陶磁器が出土することから有力者の屋敷地であることが明らかとなりました。8月29日(日)に現地説明会を行い、61名の方々に見学いただきました。

大内北3号墳は、竹野川上流の左岸に4世紀後半から5世紀初頭に築かれた古墳です。墳丘は東西25m、南北23m、高さ4mを測り、墳頂部には竪穴式石室、組合式箱式石棺、木棺といった9基の埋葬施設を確認しました。9月5日(日)に現地説明会を行い、猛暑厳しいなか20分ほどかけて、70名の方々に見晴らしの良い古墳の墳頂部まで登っていただきました。



鈴谷遺跡現地説明会

松山遺跡は、竹野川上流域に営まれた縄文時代から中世にかけての集落遺跡です。今回の調査で、幅約12m、深さ2mの流路から数度の土石流に運ばれた多量の遺物が出土しました。生憎、説明会当日の9月23日(祝・木)は荒天でしたが、地元の方を中心に62名の参加がありました。

京都第二外環状道路建設に伴う長岡京跡・鈴谷遺跡の調査では、竹の土入れ等により多量に堆積した土砂の底から、7世紀後半代の小規模の横穴式石室を持つ古墳を検出しました。この古墳は、乙訓地域で最終段階の古墳と考えられます。85名の方々に参加いただきました。

出前授業（体験学習）

地域の歴史を子供たちに知っていただこうと出前授業や発掘調査体験を実施しています。7月13日（火）には、舞鶴市立由良川中学校の全校生徒および教職員56名の方々に中山城跡の現地調査を見学していただく予定でしたが、生憎の風雨となり、学校の教室内でスライド写真を用いた説明会に切り替えました。城跡の概要を説明した後、出土遺物に触れてもらい、舞鶴市教育委員会が持参した複製のヨロイを装着して、当時の様子に思いを馳せていました。

また、9月28日（火）には京丹後市立大宮第3小学校の4年生から6年生の22名が松山遺跡の発掘体験に参加してくれました。流路内からの遺物の出土を体験し、小学校付近の歴史について学んでもらいました。

（水谷壽克）



舞鶴市立由良川中学校体験学習（中山城跡）



京丹後市立大宮第3小学校体験学習（松山遺跡）

センターの動向 (平成22年7月～10月)

月日	事	項
7 3	第116回埋蔵文化財セミナー(於：八幡市生涯学習センター、参加者74名)	
5	野条遺跡(南丹市)発掘調査開始	
6	鳥取橋遺跡発掘調査終了(5/12～)	
9	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主催者会議(於：滋賀県)肥後弘幸調査第1・2課長、小池寛調査第2課課長補佐出席	
	成相寺旧境内・難波野遺跡発掘調査委員会(於：宮津市)石井清司調査第2課主幹派遣	
13	由良川中学校56名中山城跡(舞鶴市)現地見学(雨天のため校舎内でスライド報告)	
24・25	京都府埋蔵文化財研究会(於：長岡京市)小池寛調査第2課課長補佐、中川和哉調査第2課主任調査員講師派遣	
26	柿谷古墳(八幡市)発掘調査開始	
27	人権教育(教育局別)行政担当者等研究協議会(於：乙訓教育局)肥後弘幸調査第1・2課長、小池寛調査第2課課長補佐出席	
28	長岡京連絡協議会(於：当センター)	
29	中世城館跡調査委員会(於：京都市)肥後弘幸調査第1・2課長出席	
8 6	人権大学講座(於：京都市)増田孝彦調査第2課主任調査員、黒坪一樹調査2課専門調査員受講	
7	鯖江市考古学フォーラム(於：福井県)肥後弘幸調査第1・2課長講師派遣	
10	椿井遺跡(木津川市)発掘調査開始	
11	都出比呂志・石野博信理事乙訓地域調査地現地視察	
	乙訓地域の首長墓の歴史的位置付けに関する検討会(於：乙訓教育局)石井清司調査第2課主幹出席	
	行政発掘における調査機関の役割と展望に関する検討会(於：滋賀県)肥後弘幸調査第1・2課長、小池寛調査第2課課長補佐、岩松保資料係長、中川和哉主任調査員、村田和弘調査員、今村正寿総務課主任出席	
12	下馬・片山遺跡(精華町)発掘調査終了(5/25～)	
14	設立30周年記念展覧会(於：向日市文化資料館)開催(～9/20)	
17	人権研修指導者養成研修会(於：京都市)肥後弘幸調査第1・2課長、水谷壽克調査第1課主幹、小池寛調査第2課課長補佐、引原茂治主任調査員受講	

- 18 村田修三大阪大学名誉教授中山城跡(舞鶴市)現地指導
人権研修指導者養成研修会(於：京都市)岩松保資料係長、田中彰主任調査員受講
- 20 椋ノ木遺跡(精華町)発掘調査開始
- 24 上狛北遺跡(木津川市)発掘調査開始
人権研修指導者養成研修会(於：京都市)安田正人事務局副局長、石井清司調査第2課主幹、竹原一彦主任調査員受講
千田嘉博奈良大学教授中山城跡現地指導
- 25 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 26 長岡京跡右京第994次・井ノ内遺跡関係者説明会(参加者7名)
長岡京跡右京第988次・友岡遺跡関係者説明会(参加者56名)
- 27 長岡京跡右京第994次・井ノ内遺跡(長岡京市)発掘調査終了(4/26～)
- 28 中山城跡現地説明会(参加者93名)
- 29 松田遺跡(大山崎町)現地説明会(参加者61名)
- 9 1 第90回役員会・理事会(於：当センター)上田正昭理事長、中尾芳治副理事長、小池久常務理事・事務局長、石野博信・井上満郎・都出比呂志・中谷雅治・増田富士雄・高熊秀臣・川村智各理事、清水浩平・橋本幸三監事出席
- 4 設立30周年記念講演会「天平浪漫紀行・京都」(向日市民会館、参加者210名)
- 5 大内北古墳群(3号墳)(京丹後市)現地説明会(参加者70名)
- 10 長岡京跡右京第988次・友岡遺跡(長岡京市)発掘調査終了(5/21～)
- 18 「遺物に学ぶ」考古学講座第1回『桃山陶器の世界』講師：伊野近富調査第2課次席総括調査員(参加者14名)
- 20 設立30周年記念展覧会閉会(8/14～、参加者2,208名)
- 22 長岡京連絡協議会(於：当センター)
人権大学講座(於：京都市)高野陽子調査第2課調査員受講
大内北古墳群(京丹後市)発掘調査終了(4/30～)
- 23 松山遺跡(京丹後市)現地説明会(参加者62名)
- 25 「遺物に学ぶ」考古学講座第2回『朝鮮半島からきた陶質土器』講師：小池寛調査第2課課長補佐(参加者13名)
大阪府立弥生文化博物館「弥生時代入門講座」肥後弘幸調査第1・2課長講師派遣
- 26 広島庄原市シンポジウム(於：庄原市)肥後弘幸調査第1・2課長講師派遣
- 27 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所特別研修「三次元計測課程」村田和弘調査第2課調査員受講(～10/1)
松田遺跡(府道、大山崎町)発掘調査開始
- 28 京丹後市立大宮第三小学校4～6年生松山遺跡体験学習(参加者22名)

- 29 人権大学講座(於：京都市)竹原一彦調査第2課主任調査員受講
松田遺跡(大山崎町)発掘調査終了(6/2～)
二府一県会議(於：大阪府)肥後弘幸調査第1・2課長、小池寛調査第2課課長補佐、岩松保資料係長出席
- 10 1 最初の評議員選定委員会開催(於：京都市)外部委員竹岡敏・村井康彦・永井規男・池田博・橋本幸三各委員、センター小池久常務理事・事務局長、安田正人事務局副局長、杉江昌乃総務係長出席
- 2 「遺物に学ぶ」考古学講座第3回『縄文時代の主食、ドングリを語る』講師：増田孝彦調査第2課主任調査員(参加者28名)
- 6 乙訓地域「応急手当講習」石井清司調査第2課主幹、小池寛調査第2課課長補佐、辻本和美調査第2課次席総括調査員受講
人権大学講座(於：京都市)引原茂治調査第2課主任調査員受講
- 8 中山城跡(舞鶴市)発掘調査終了(5/10～)
- 9 「関西考古学の日」記念講演会(於：滋賀県立図書館)肥後弘幸調査第1・2課長、小池寛調査第2課課長補佐出席
- 12 人権大学講座(於：京都市)伊野近富調査第2課次席総括調査員受講
- 15 恭仁宮調査専門委員会(於：木津川市)岩松保資料係長派遣
- 16 「遺物に学ぶ」考古学講座第4回『近世陶磁器は語る』講師：引原茂治調査第2課主任調査員(参加者14名)
鈴谷遺跡(長岡京市)現地説明会(参加者85名)
- 17 長岡京市歴史講演会(於：長岡京市)中川和哉主任調査員講師派遣
- 18 人権大学講座(於：京都市)中川和哉調査第2課主任調査員受講
京都府庁2号館ロビー展示(～22日)
- 23 「遺物に学ぶ」考古学講座第5回『木器からみた古代の生活復元』講師：戸原和人調査第2課主任調査員(参加者19名)
- 26 長岡京跡右京第1006次関係者説明会(参加者3名)
- 27 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 28 松山遺跡(京丹後市)発掘調査終了(5/25～)
- 30 帝塚山大学市民大学講座(於：奈良市)石井清司調査第2課主幹講師派遣

編集後記

情報第 113 号をお届けします。

当調査研究センターは昭和 51 年に設立され、平成 22 年の今年で創立 30 周年を迎えます。9 月 4 日には上田正昭理事長、菱田哲郎京都府立大学教授をお迎えし、記念講演会を開催しました。その時の上田理事長の講演を誌上で公開しております。

京都府内には平安京・長岡京を抱え、ともすれば平安時代以降の歴史だけに偏りがちですが、奈良時代においても国の中心として、政治・経済の中心地であったことが説かれております。まさに、目から鱗の講演でありました。

(編集担当 岩松)

京都府埋蔵文化財情報 第113号

平成 22 年 11 月 30 日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER